



北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原, 国男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5033

北海道家庭学校寮長藤田俊二の実践記録一覧

河原国男

A Chronological List of Syunji FUJITA's Practice Records As a Teacher at a Reform School : 'Hokkaido Home School'

Kunio KAWAHARA

1. はしがき

北海道家庭学校寮長藤田俊二(1932-2014, 昭和7-平成26)は、1963(昭和38)年から1993(平成5)年までの在職期間中を中心に数多くの実践記録を残した。個人による記録としては、圧倒的な分量である(資料1)。その質においても、「普遍史」的な吟味に耐えうる卓越性を示しているであろう。その記録について、本稿は、現時点で把握できたものを一覧にしてまとめるものである。

藤田の生涯(拙稿「北海道家庭学校寮長藤田俊二年譜」『宮崎大学教育文化学部紀要』教育科学、第27号、2012、参照)において、重い位置を占める「実践」ということばで何を指すか、はじめに概念規定しておこう。先行する所見(斎藤浩志「教育実践とは何か」『現代教育学事典』労働旬報社、1988)を参考に、人間が対象(自然、社会、個人)に目的意識的に働きかけるという基本構造をもった活動過程を指すものとして、本稿では「実践」ということばを使用する。その場合、内容に即し4つの点に留意したい。

第一に、人間が対象に、という点について。対象とは北海道家庭学校の少年たち、とりわけ石上館に所属する少年たちを指す。「人間」とは、誰が、という活動の主体を示す。具体的には寮長藤田俊二を指す。実践者という場合には-寮母として藤田に同伴した、藤田節子夫人の役割も不可欠であるが、第一義的には-藤田俊二という主体の活動を尊重したい。その場合に2つの成立契機が想定できるだろう。第一に学校全体としての共通規範。北海道家庭学校全体の基本理念(「教育事業」、「境遇の転換」、「家庭にして学校、学校にして家庭」、「天然の教育」、「難有」、「流汗悟道」など)、年間行事(朗読会、平和山登山、運動会、10kmマラソン大会、修学旅行、収穫感謝祭、スキー大会、雪像コンクールなど)、運営方式(夫婦小舎制、午前の学業、午後の作業班活動、作業賞受賞など)等の諸規範にしたがい組織の構成員として活動している契機がある。こうした諸規範は、創設者留岡幸助の時代以来、倫理的習慣として長い年月をかけて機能し、「伝統」として定着している。そのような共通契機とともに第二に、藤田個人としての目的・方法意識に導かれた活動の契機がある。少年一人一人に即して自発的に日誌を作成

したことが、そのことをなによりも証明する。また、行動からはうかがい得ない少年の内面を理解するため、少年一人一人が綴る日記について藤田は、必要に応じて題目を設定して働きかけていた経緯（1967～1990）がある。とりわけ1981（昭和56）年には積極的に働きかけ、その設定が30回を越えていた。具体的題目は多様で、「生んでくれた母と育ててくれた母」という題目（1981.12.22）も、その一例である。こうした事情も、個人的契機によって成立している。内容に示されたその日誌の決定的な徴表は、家庭学校内部での少年にかかわる生活上の出来事についての具体的事実関係の記述に徹して限定しながらも、家庭学校内部の関係者（校長、同僚など）にむけた報告を目的として記された文書ではなく、より一般性の次元を意識して記述されている点である。日誌の記述が具体的描写性とともな説明的配慮を示している場合があることは、その点を表している。一例をあげよう。寮内では寮生の誰々を誰々の「親とする」ということがある。「親とは新入生の面倒一切を見る重要な役だけに古参でかなりの力のある者でなければつとまらないのだが」と、藤田は日誌（整理番号76：1980.1.10）で説明的な配慮をもって記している。現在および将来における理解者－少年のおかれた境遇を想像し、なほどこか共感にいたれる理解者－を読者として期待感とともに想定していることがうかがえる。この種の配慮は、在職中の日誌の全体に通底する。藤田の実践記録、とりわけ日誌を特徴づけているのは、以上2つの契機のうち－両者が不可欠な重要性を示しているが－後者が際立っていることである。

第二に、目的意識的に、という点について。「実践」はしばしば「理論」と「実践」と対比して把握されるが、藤田の場合には「理論」という形式を期待することは、適切さを欠く。事実認識、意識、意見、願望、期待、予想、賛嘆、叱責（「大喝！」）などを包括したものとして「思想」に着目したい。日常語としていえば「思い」である。それは、思想それ自身として藤田自身によって自覚的に把握されたり、もしくは藤田の自覚のいかに越えて、実践記録そのものに表出されうるのである。

第三に、目的意識的という場合の目的の意味について。少年に対する働きかけの目的は、創設者留岡幸助が提示した理念に即して「教育事業」として行われてきていること、そして、少年たちから「寮長」は「先生」と一般に呼ばれている実状その他を踏まえれば、教育実践として捉えることは不都合ではない。しかし、本研究では、ただちに教育実践と把握することに対し、あえて抑制的であろうとする。藤田が示した実践とその記録は、北海道家庭学校史という文脈を越えて、「教育」とは何か、という根源的ともいえる問題提起を含んでいると筆者は予想するからである。この点も内容的な検証を踏まえ、適切性のいかに吟味したい。

第四に、活動過程について。過程として捉えることは、とりわけ2つのことを意味する。第一に、始まり、中間、終結があるということ。藤田の働きかけの場合には、特定の少年の入所（入寮）から卒業就職までの－少年によっては、転寮、少年院入所、公立中学校復学といった経過をとる－一連の少年の生活事実、行動にかかわる藤田の活動の過程があるのみではない。その活動過程が職務上は第一義的に重要であるが、家庭学校を離れた後の経過に対する応対（卒業後のかかわり）も、藤田にとって不可欠な責務的な課題として継続的に意識されていた。したがって、寮長としての職務上の実践と、その機会は、在職中のみならず、以後、現在にいたるまで（2014年5月）、藤田自身の主観的意識のなかでは進行中といえる。第二に、少年から働き返されるという双方向があること。日誌は、その種の実践の諸局面を伝える。藤田の期待に反する場合もあれば、予想をはるかに超えて、賛嘆の念が喚起される場面（資料2）も、数限

りない。少年別の日誌には、記述した日付けの箇所に、当の少年の日記が糊付けして添付されている。藤田の日誌と少年の日記とを対比するならば、事例によっては、対話的ともいえる交流場面が展開している。その様相一つ一つは断片（資料3）であるが、一人一人に即し、また複数の少年に即し、一連のものとして具体的に跡づけるに値する。

以上のように留意する職務上の実践にかかわって、藤田自身による記録の全体を、本研究では便宜的に次のように類別する。

- I 日誌：藤田が家庭学校に着任したのが1963（昭和38）年6月で、向陽寮、洗心寮を経て石上館寮長就任にいたったのが1965（昭和40）年4月だった。その年、藤田は33歳になる。同年の10月入校し、同寮に入寮した少年について専用のノートを用意して入寮当日より記録するようになった。以後、1990（平成2）年までの25年間にわたって、石上館に入寮してくる少年について、個人別にノートを用意し、毎日欠かさず記述し、合計して147名の日誌を蓄積することになった。石上館での寮生活がもっとも長期にわたった事例は5年3か月で、藤田の日誌も－添付された少年の日記も包み込みながら、分厚く－16冊に及んだ（資料4）。日誌全体の現物は、筆者が藤田から託されて宮崎大学教育文化学部の所属講座内で保管している（2006年7月以降）。
- II 報告：北海道家庭学校機関誌『ひとむれ』に掲載された「蔬菜部」「園芸部」といった作業部報告や東北・北海道地区の教護院研修会で報告した文書「寮長二十年のくぎりに」（1983）など。
- III 著作：『もうひとつの少年期』（晩聲社 1979）、『まして人生が旅ならば－北海道家庭学校卒業生を訪ねて－』（教育史料出版会 2001）。
- IV 論説等：民間の雑誌等に掲載されたもので、その時々編集者、団体等から求められた問いに対する所見をその一般読者に向けて、少年の事実関係を踏まえながら啓発的に述べた説明的文章。
- V その他：講演および未発表原稿。

実践の記録として以上の5類を全体構造として把握すれば、I類の日誌がもっとも基底部分におかれている。在職中持続的で分量としても膨大である。読み手は明確な形では特定されていない。その時々身長、体重、学業成績、入賞など客観的な生活諸事実とともに、藤田個人の主観的所見－藤田の眼に映った一人一人の成長の事実とそれについての評価等－が豊富に記述されている。「どっしりとした風格」「重み」などの表現は、少年たちに共通して藤田が一貫して用いていた。そうした実践記録の内容を基底に、その上部において客観的事実を中心に整理し記述し（「蔬菜部」報告なども含む。資料5）、一部において、指導のあり方等について反省的に抽象化して明確にした方針の提示を含みながら、職務課題を同じくする専門家を読み手として特定して、知識情報の共有を目的として報告された記録が、II類である。こうしたI、II類の内容は、III類を成立させる。すなわち、I、II類の内容について、たとえその一部分に過ぎずとも記述し、同業の専門家のみならず、同時代における学校教育、児童福祉、少年司法等の諸分野に携わる人々、一般読者を想定し、一定の主題（主導動機）のもとで知識伝達し、少年たち、卒業生たちのあり方について理解を求めたいという願望や啓発的動機に支えられ、III類に属する著作が成立している。「もうひとつの少年期」という書名そのものが、この種の動機を部分的に表している。IV類に属する論説等には、IIIの動機をより徹底して、主張を明快に

打ち出している部分がある。「『非行少年』という『少年』はいない」、「息のながい仕事でありたい」といった基本的所見を含む論説などは、この類を代表する。分量的には多くはないが、事実の記述に徹しようとする藤田の記録のなかにも、こうした問題提起的な思いを披瀝する部分を見出すことができる。機関誌「ひとむれ」の後記を藤田は担当することがあったが、断片的にその種のものが初期の記録でも表れている（資料6）。現状打開を求める、こうした発言へ意欲は、直接的な形で聴衆に語ることにむかった。退職後、求めに応じて藤田は全国各地で講演を行うことになった。その場合でも一日誌現物を演壇上に置いて、もしくは、あるかのごとく－事実在即す、という姿勢は基本的に保持されていたと推測される。V類には、「その他」として、文章記録そのものではないが、関連する事項ということで、その講演実施状況をまとめた。この類には、もう一つ、未発表原稿をここに位置づける。IからIVまでのいずれかに積極的に位置づけることが困難であるゆえに、この部類とした。しかし、その一点の内容はといえば、藤田の少年理解の深みの度合い－とりわけ苦難についての共感的な理解－とその「普遍史」的意味を示すという点で、最高度に重要な資料であるにちがいない。

2. 実践記録一覧

I 日誌

氏名を伏せた形で一覧にして本稿で、別記した。

1. 個人表記について。

1965（昭和40）年10月から開始された第1冊のノート表紙には「**君行動記録」と記されている（**は少年の氏名）。以後、ノート（大学ノート）には「行動記録」の表記はなく、氏名とともに、記述した開始日と最終日とがマジックで表記されている。本研究では、実名・仮名は表記しない。少年についての藤田の日誌を少年個人別に整理上の番号を付すこととした。氏名を表す場合、「** (1)」の場合、整理番号1の少年の氏名を指す。なお、整理番号と実名との対照表は、個人情報保護の見地を厳守して筆者（河原）が保持している。

2. 時期区分について。

最終の日誌は、1990（平成2）年1月に入校・入寮した少年について記述したもので、整理番号を147と付した。60歳定年退職になる1993年3月末日以前、1990年3月まで藤田は継続して記述した。1965年10月以来記しているの、ちょうど30年の在職中、25年間記述したことになる。この膨大な日誌（147名分）を便宜上、3期に分けることとした。1969（昭和45）年4月谷昌恒校長就任を画期にして、前後を分ける。それ以前は、留岡清男校長時代で初期とする。「寮長二十年のくぎりに」（資料7）を公表した1983（昭和58）年11月を境に谷校長時代を中期・後期に分ける。概ね、藤田三十代が初期、四十代が中期、そして50代が後期になる。

初期（1965.10～1969.3）	：17名	整理番号	1- 17	藤田33-36歳
中期（1969.4～1983.11）	：90名	整理番号	18-107	37-51歳
後期（1983.12～1990.3）	：40名	整理番号	108-147	52-58歳

3. 日誌作成着手以前の寮生について。

藤田は、着任した1963年6月の時点より、整理番号1の少年を引き受けるまでの間に、資料

によって確認できるかぎり、17名の少年と過ごした。着任の時点ですでに入寮していた少年を引き継いだケース、あるいは、入校し入寮したが、間もなく転寮したケースなどがある。これらの少年について、藤田は日誌を作成していないので、0-1、0-2、のように表記し、在籍期間のみ確認することとした。これらの寮生の一部は、後に卒業生として石上館を訪問し、日誌のなかに登場してくる。

II 報告

- (1) 「蔬菜部」『ひとむれ 収穫感謝特集』通巻299号、1967年12月10日
- (2) 「蔬菜部」『ひとむれ 収穫感謝特集』通巻311号、1968年12月1日(資料5)
- (3) 「1年の仕事を終えて」蔬菜部報告『ひとむれ 収穫感謝特集』通巻335号、1970年12月1日
- (4) 「低学力学級からの報告」『ひとむれ 教育特集号』通巻353号、1972年4月1日
- (5) 「わが寮卒業生36名の予後記録」同上
- (6) 「後記」同上(資料6)
- (7) 「園芸部」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻407号、1976年5月1日
- (8) 「日誌抄-Kのこと-」『ひとむれ 教育特集号』通巻411号、1976年9月1日
- (9) 「千歳方面を歩いて」『ひとむれ』通巻470号、1981年1月1日
- (10) 「たゆたいの夏」『ひとむれ』通巻480号、1981年9月1日
- (11) 「道央を歩いて」『ひとむれ』通巻483号、1982年11月
- (12) 「園芸部」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻485号、1982年2月1日
- (13) 「園芸果樹部」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻497号、1983年2月1日
- (14) 「『重味』について」『ひとむれ 500号記念特集号』通巻503号、1983年7月1日
- (15) 「夏の旅」『ひとむれ』通巻505号、1983年9月1日
- (16) 「寮長二十年のくぎりに」昭和58年度全国教護院教護研修会、1983年11月16日(資料7)
- (17) 「果樹園芸部の1年」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻512号、1984年3月1日
- (18) 「乱山の若者群像」『ひとむれ 創立七十周年記念誌』通巻521号、1984年9月
- (19) 「あしがき」同上
- (20) 「果樹園芸部の1年」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻529号、1984年11月23日
- (21) 「あしがき」同上
- (22) 「果樹園芸部」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻538号、1985年11月23日
- (23) 「後記」同上
- (24) 「札幌、小樽、岩内を歩いて」『ひとむれの若者たち-倅せへの回帰の模索-』1986年1月、北海道家庭学校
- (25) 「後記」同上
- (26) 「果樹園芸部」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻551号、1986年11月23日
- (27) 「後記」同上
- (28) 「果樹園芸部のこと」『ひとむれ 収穫感謝号』通巻554号、1987年11月23日
- (29) 「後記」同上
- (30) 「果樹園芸部の1年」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻577号、1988年11月23日
- (31) 「後記」同上

- (32) 「果樹園芸部」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻590号、1989年11月23日
 (33) 「後記」同上
 (34) 「後記」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻612号、1991年11月23日
 (35) 「後記」『ひとむれ 収穫感謝特集号』通巻626号、1992年11月23日(資料8)

Ⅲ 著書

- (1) 『もうひとつの少年期』晩聲社、1979
 初期(1960年代)に入所した少年3名についての日誌記録。少年は「島田」「水木」「郷田」という仮名で登場する。それぞれ日誌は現存し、** (16)、** (9)、** (5)を指す。
 (2) 『まして人生が旅ならばー北海道家庭学校卒業生を訪ねてー』教育史料出版会、2001

Ⅳ 論説等

在職中

- (1) 「僕の学級ーけなげな努力に頭が下がるー」『小さななかま』第100号、1979年9月
 (2) 「続もうひとつの少年期」第1回『けやきの街』第27号、1980年7月
 (3) 「続もうひとつの少年期」第2回『けやきの街』第28号、1980年8月
 (4) 「『非行少年』という『少年』はいない」『季刊 人間雑誌』第4号、1980年9月
 (5) 「続もうひとつの少年期」第3回『けやきの街』第29号、1980年9月(未確認)
 (6) 「続もうひとつの少年期」第4回『けやきの街』第30号、1980年10月
 (7) 「続もうひとつの少年期」第5回『けやきの街』第31号、1980年11月
 (8) 「続もうひとつの少年期」第6回『けやきの街』第32号、1980年12月
 (9) 「かみさま お父さんお母さんを仲良くさせてー北海道家庭学校へ送られてきた少年の心の軌跡ー」日本子どもを守る会編『子どものしあわせ』第314号、1980年11月5日、草土文化
 (10) 毎日放送ラジオ・インタビュー記録「悲しみを奥歯で噛み切ってしまえー非行少年逆転の軌跡ー」1981年7月
 (11) 「続・春・断片ー日記と手紙ー」『北方教護』1981年9月30日
 (12) 「立春以後」全国教護院協議会『非行問題』第185号、1982年
 (13) 「対談 夫婦が強く生きていくのが唯一のささえ」近藤薫樹と対談、『ちいさいなかま』第133号、1982年5月
 (14) 「不安なのです 子どもたちは」『月刊地域保健』第15巻第7号、1984年7月
 (15) 「対談 親がつよく生きていくのがささえ」近藤薫樹編『子育てー21世紀にかけるー』1984年、草土文化
 (16) 「『悲しみの子どもたち』をふやさない」『子どものしあわせ』第386号、1986年1月
 (17) 「乳の優しさ」『ちいさいなかま』第184号、1986年1月
 (18) 「いつもながらに酔いつぶれて」『母の友』第395号、1986年4月
 (19) 「夏から秋」『非行問題』第193号、1987年1月
 (20) 「益田喜頓のこと」『やまなみ』遠軽町図書館10周年記念誌、1990年8月
 (21) 「佐名のこと」『非行克服現場からの報告⑥ 明日にはばたけ』1991年、全国教護院協会
 (22) 「続もうひとつの少年期」『非行克服現場からの報告⑧ 親って 家族ってなかに』1993年、全国教護院協会

(23) 「『山びこ学校』のこと」『非行問題』第199号、1993年、全国教護院協議会

退職後（1993年4月以降）

- (24) 「非行少年という少年はいないー「もうひとつの少年期」再論ー」『月刊 社会教育』第455号、1994年
- (25) 「『山びこ学校』と無着成恭先生のこと」『道南市民ジャーナル』創刊号、1997年3月
- (26) 「人生相談回答 義父の眼をみすえて頑張る」『現代ニッポンにおける人生相談 週刊朝日別冊』1997年6月
- (27) 「息のながい仕事でありたい」『平成12年度 宮崎大学教育文化学部フレンドシップ事業報告書「体験」を通じての学び』2001年3月
- (28) 「旅の途中」『非行問題』第207号、2001年、全国児童自立支援施設協議会
- (29) 若い友人への手紙『おおの』2003年1月、大野町教育委員会
- (30) 「追慕」（藤井常文『北海道家庭学校と留岡清男ー創業者・留岡幸助を引き継いで』三学出版、2003年7月）
- (31) 「大いなる責任」『おおの』2004年1月か、大野町教育委員会
- (32) 「7%のための教育論を」『生活と自治』第432号、生活クラブ事業連合、生活協同組合連合会、2005年4月
- (33) 「じっくり、さりげなく聴く」『生活と自治』第433号、生活クラブ事業連合、生活協同組合連合会、2005年5月
- (34) 「曖昧な存在を引きずって生きる」『生活と自治』第435号、生活クラブ事業連合、生活協同組合連合会、2005年7月
- (35) 「93%の子どもたちは序列化の中で…」『生活と自治』第436号、生活クラブ事業連合、生活協同組合連合会、2005年8月
- (36) インタビュー記事「『自立』を支える」『いるか通信』第5号、2005年4-6月
- (37) 「ごあいさつ」『ふくろう通信』（「青少年の自立を支える道南の会会報」）No.1、2005年9月18日
- (38) 「設立趣旨 新たなスタート」パンフレット「青少年自立援助ホームふくろうの家」2007年8月
- (39) 「新しい船出」『ふくろう通信』No.5、2007年8月10日

V その他

講演

- (1) 1996（平成8）年11月6日、立正大学経済学部
「もうひとつの少年期のその後の人生」（講演原稿あり）
- (2) 1997（平成9）年11月21日、横浜知的障害関連施設協議会
「施設的生活ーもう一度教護をやりたいー」
- (3) 1999（平成11）年10月23日、北海道里親連合会（洞爺温泉ホテル）
「少年達の群像ー北海道家庭学校の30年を振り返りつつー」
- (4) 2000（平成12）年12月、宮崎大学教育文化学部
「北海道家庭学校の教育についてー自然、労働、生の賛歌の回復ー」

- (5) 2002 (平成14) 年1月30日、大阪府立大学社会福祉学部
「北海道家庭学校の教育について－自然・労働・人生の賛歌の回復－」
- (6) 2002 (平成14) 年11月16日、高知県立高知学園
「北海道家庭学校の30年をふり返りつつ非行とは何だったかを問う」
- (7) 2002 (平成14) 年11月18日、文京学院大学
「もう一つの少年期を生きる子どもたち」
- (8) 2003 (平成15) 年5月21日、大野町高齢者大学
「将来を語り合いながらの厳しい対峙の30年－ともに暮らした少年たちとの日々と書き続けた日々－」
- (9) 2005 (平成17) 年8月27日、上磯町民協第2ブロック講演会
「特色ある少年達と交わって」(主催者側設定の仮題か)
- (10) 2005 (平成17) 年9月16日、札幌 (主催者未確認)
「少年の不安」(講演原稿8枚)
- (11) 2005 (平成17) 年11月16日ルーテル市ヶ谷センター、厚生労働省・東京都・全国児童自立支援施設協議会「児童自立支援事業105周年記念大会」記念講演
「息のながい仕事でありたい－自然、労働、人生の賛歌の回復－北海道家庭学校の教育について」
- (12) 2006 (平成18) 年1月30日、東京都立誠明学園
「北海道家庭学校で暮らした30年、そして今」
- (13) 2006 (平成18) 年2月25日、北斗市かなでーる
「息のながい仕事でありたい－人生の賛歌の回復・自然、労働、家庭－」
- (14) 2008 (平成20) 年6月21日、児童家庭支援センター (千葉)
「子どもの心とどう向き合うか－児童自立支援施設と自立援助ホームでの経験から－」

未発表原稿

1. 「誰れが悪いのでもない－ある父子の1960年から1994年2月までの日々－」(原稿用紙157枚)
退職して帰郷後に執筆。1978年5月、北海道札幌市内で起こった少年通り魔事件の記録に基づく。
「平井幸策」(仮名)という少年についての記録。タイトルは、原稿本文で断っているように、萩原葉子『誰が悪いのでもない－明子は何処へ－』海竜社、昭和61年、による。当該少年についての藤田の日記は現存する。整理番号89。
2. 「歲月」原稿用紙6枚。

附記

藤田俊二氏は、2014 (平成26) 年7月29日、今年からの闘病生活の末、逝去された。81歳。生前のご厚誼に感謝しつつ、謹んでご冥福を祈ります。合掌。

資料1

退職後、北斗市の自宅2階で保管された全日誌。ノートは個人別に用意されている。少年の日記もその日の記述箇所に添付されている。実践記録全体のなかで、もっとも大きな部分を占める。



資料2

この日(1979.10.23)、少年** (74) の落ち葉取りの情景を記している。この少年についての藤田の日記も、少年の毎日の日記から印象深い箇所をしばしば引用し、少年と対話するかのよう記述されている。

発	受	前	1.	?
信	午	学	現	

10.22 改めてずっさり心胸にしている。

16才の誕生日

** (74) よ。

1979年16才の誕生日を、家庭学校で迎えたこと、大根の葉っぱを落としていながら迎えたこと、長い人生の1本の根っこになると思ふよ。

10.23 木の葉が1朝ごとに散り落ち、僕達は、毎朝地べたにへばりついてる落葉を1枚1枚拾ってはぎとらねばならぬ。

今朝などはもうす氷張っているだけに、道路の落葉取り(落葉掃きではない!)はほんとは辛い仕事なのだか、1枚1枚丹念にはぎとっていた** (74) の真面目さが僕から遠い場所では少し銀の様に光っていた。

なんにも喋らなくていい、無駄な動きをしない。唯黙々と落葉を1枚1枚はぎとっては左手に持ちため、手にいっぱいになるまで林の中に捨てるだけだけの単純な仕事なのだ。その単純さの中に真面目不真面目の区別はつきりあつた。

** (74) の真面目な姿には他の範となる筋男らしく通っていて、僕などは唯感心して唸るばかり。

10.24 ○ソフトボール大会。

敗	桂林寮に	13対3
勝	平和寮に	3対0

優勝候補桂林寮にはどうも勝てなかつた。

資料3-1

桂の苗木を植える作業の様子を記している少年（整理番号85）の日記（1981.11.6）。

56年11月6日 金曜 天気(晴れ) 氏名(**) (85)															
作業	朝 炊事	使用道具													
	夕 牛乳缶	ごみ付付													
音信	発 へ	音信内容													
	受 から	ハガキハガキ 手紙手紙													
午前 (学習) 班毎 寮毎 寮用 寮毎 行事 レクリエーション 其他 ()															
学習	1. 科目	理	内容	地層	村上先生	3. 科目	国	内容	藤田先生						
	2. 科目	習	内容		川口先生	4. 科目	体	内容	サッカー	正国先生					
午後 班毎 寮毎 寮用 寮毎 行事 レクリエーション 其他 (全校作業)															
内容 植木 かつさ (藤田先生)															
記録	挨拶	返事	報告	むくれ	けんか	破損	管理	健康状態	通院	違反行為					
	良・悪 忘れた	良・悪 忘れた	良・悪 忘れた	有・無 ()	有・無 ()	有・無 植木	かしない (有・無)	良・普通・悪 どこか()	有・無 ()	有・無 ()	有・無 ()				
これから は物を大切 に使って いきたく 思う。	ボ	コ	ま	直	グ	こ	そ	し	く	つ	最	い	苗	今	
	キ	で	ま	径	サ	を	の	て	く	て	初	と	を	日	
	ッ	頭	で	10	ッ	切	木	二	し	い	山	も	植	は	
	ッ	に	抜	cm	と	ら	の	個	ま	ま	林	手	え	午	
	ッ	来	け	も	カ	う	根	目	した	た	部	間	ま	後	
	ッ	て	な	あ	い	と	こ	の	た	が	の	の	した	か	
	ッ	の	く	る	い	し	が	穴	た	は	植	か	か	ら	
	ッ	で	な	よ	ば	て	天	は	は	と	林	か	か	の	
	ッ	や	ッ	う	さ	植	山	大	大	思	ぐ	か	る	全	
	ッ	ッ	ッ	な	し	林	出	き	き	い	わ	か	る	校	
ッ	た	ッ	な	な	を	て	な	な	っ	一	か	る	作		
ッ	ノ	ッ	根	根	を	い	木	木	つ	個	業	で	の		
ッ	根	ッ	が	に	を	て	の	の	つ	目	し	した	植		
ッ	切	ッ	れ	さ	を	い	近	近	頭	の	時	と	林		
ッ	れ	ッ	た	さ	を	い	く	く	張	の	は	は	の		
ッ	た	ッ	さ	さ	を	い	な	な	た	穴	は	は	の		

資料3-2

植林に取り組んだ少年のことに藤田はその日誌(1981.11.6)でふれる。

** (85) に来る手紙、** (85) が出す手紙、これも心優い手紙ばかりである。

「おまがにこの学校で暮らしていると、体力はつくし、スポーツも色々出来るようになるし、勉強も前よりも良くなったし、とにかく健康的になったのよ」とても良かったと思う。」

こまが日記ではなくて手紙であることは、尚更に嬉しくなっているんだよ! ** (85) 。

11.5

① 早朝6時、全校で平和山に登る。

20番位で登った平和山登山、体育の時間にもやった馬跳びという遊び。(僕が田中先生の代わりに出た) これも** (85) の元気の活躍が光ったが、今日はごうた。

② ** (85) へのきれいな便所掃除

を記録しよう。

11.6

桂林寮から展示林に至る林道左側に大きな桂の苗木を100本全校で植えた午後、この桂が成長して見事な並木をつくる30年後を思い、何かしみりとした気持ちになっていた。この頃** (85) は45才! 一家をなしているだろうなあ! ~~~~~。

鉄を1本折ったこと半年用の中に埋もれてしまふよ。

11.7

** (90)、** (84)、** (85)、** (88)、こまが中堅クラスの者に対する** (82) の威張り様が気になって来たのだが、今日の** (88) への暴力を身にすると** (82) と呼んで大喝し、静食堂へ謹慎とする。夜も8時近くになっての大喝だけに、一人一人の反応は知るまぐまが、多くの子の顔にはありありと安堵の表情がほとり、息切

資料 4

整理番号33の寮生。事情あって、小学第4学年から入寮した。卒業は中学第3学年の3月。卒業の日の前夜、藤田は次のように記した。「あんまり感傷的な雰囲気になってしまったら辛くなる気がして、コーラを飲みながら、昔の石上館の話などをしてできるだけさりげないかたちの送別会にしたのだった。いよいよ今夜で最後、** (33) の転出証明を見せながら、『明日からは札幌の市民になるんだぞ！札幌の人口は1人ふえるんだ！』と言ったら、『札幌の人になるのかい僕も！』とびっくりしていた眼の輝きが印象的だった」(下線部朱筆)。



資料5

作業班活動で、この時藤田は蔬菜部を担当し、所属した少年たちを指導した。家庭学校着任後6年目。

昭和43.12.1 ひとむれ 311

蔬菜部 藤田俊二

蔬菜名	収量	面積
ネギ	32,000本	15a
ゴボウ	500k	5
玉ネギ	200k	3
大根	11,500本	20
ヤバツ	1,900	10
西風	62 ⁴	4
人参	2,500k	15
南風	1,580 ⁴	20
アスパラガス	50k	2
ホーレン草	50k	1
白菜	1,400 ⁴	10
大豆	1,800 ⁴	2
枝豆	2,800 ^本	5
ささげ	120 ^k	2
長芋	60 ^本	1
トキビ	11,500 ^本	20
金時豆	80k	5
赤カブ	2,500 ⁴	5
胡瓜	100k	0.5
カリフラワー	230 ⁴	5
しろ菜	50k	0.5

今年も雪が少なく、春のどしは全く好調だった。ゴボウは去年の秋に蒔いていたので、雪が消えると一斉に発芽した。秋蒔きの成功に、はつと胸をなでおろした。秋蒔きゴボウは翌年の夏から秋にわたって食べ、春蒔きゴボウは越冬用と翌春に食べるという方式を、今後はきちんとやりたい。

散々いためつけられて来た晩霜への対策は、去年以上に万全の態勢をとっていたが、遂に五月十三日以後はこなかった。去年買ったポンプに

今年モーターをとりつけ、ホースは百米、ます万全の備えだけに、霜に脅かしたをくっていささか苦笑した。しかし油断は禁物、来春もまた、「霜対策」からスタートしなればならぬ。

今年建てた六坪ばかりの小さなビニールハウスは、予想以上に役に立った。僕が悪野苦斗の末に作り上げたビニールハウスだっただけに、不恰好でも、その中で西瓜、胡瓜などの芽がすくすくと育つていくのを見ながらの感動は、今年一番のものかも知れない。

ビニールハウスの完成を一番喜んでくれたのは、一昨年から蔬菜部

都立えぬきの**君と**君と**君と**君も随分喜んでくれたのだが、**君と**君の喜びには、僕と同じ感動がこめられていたように思う。東京の看板屋さんで働いている佐治君をしみじみと思ひ出り彼の人の良さと、東京の騒音とどんな風に融合していくのか？

来年はもう一株のビニールハウスを作る計画であり、どれ位の大きさかでどんな型式にするかを、一考かけてじっくり検討してみたい。

ビニールハウスを作る前提となるのは、どの時期になにを栽培するかであり、採算的にもペイしつつ、少年達と共に夢を育てるビニールハウスをつくり上げたいと思う。

今年つくった作物は別表の通りであるが、今年初めてとり入れたポリエチレンシートによるトキビのマルチング栽培の成功は、前記のビニールハウスと共に、大きな自信を与えてくれた。実験の成功は、次の実験への

資料6

家庭学校着任10年目。「義務教育」への問いかけとともに、幸助、清男の伝統をうけ継ぎ、新たに谷校長時代が始まったことを、藤田は力強く受けとめる。

後記

私共のささやかな仕事を、教育特集号と銘うって、初めてのタイプ印刷として発行することに、いささかのためらいと気恥かしさをおぼえつつも、敢えてお届け致します。

七才から十五才迄の義務教育大系の中で、教護院での教育がどの様に位置づけられ、意義づけられているのか、正直、明快な指標がありません。

「非行少年」「非行改善」という言葉の持つ暗さ、かつての「不良少年」という言葉には、どこかに親しみの通え合えるロマンがあったし、事実かかつての「不良少年」だったことをにやにやしながら語る多くの大人には、ただ勉強一途に励んだ「点とり秀才」には無い、鍛えられた意志と人間的なぬくもりの魅力があります。

言葉にこだわるではありません。「非行改善」ということが、あれもこれも矯め過ぎて、子供が本来持っているロマンに満ちた野性の魅力をきれいさっぱり取りはらって、走り廻ることすら出来ない妙におとなしい子供をつくることになってはいけないと私共は思うのです。

私共は、午後からいっばい、山や畑にとび散って働いています。四百六十町歩を学校とした留岡幸助先生の素晴らしい意志が、多くの先輩諸先生によって着実に継承され、戦後の重大な危機を、留岡清男先生の卓抜した理論と実践によって乗り切り、今、私共はまさしく谷校長先生を頂点としたチーム・ワークによって、教育計画第三期に入っていることを互いに認め合っています。

広大な山や谷を駆けまわる野性が、それぞれの分担で孜孜としてはたらく責任感を持ち、算数、国語、理科、社会、英語等の具体的教科習得への意欲にみちて豊かな人間性の開花にいそむ教育農場への志向が、私共の目指す第三期の最終目標でありましょう。

この小冊誌にまとめられたリポートは、まだまだ全校の仕事を網羅したものではなく、これからへの小さな出発として、厳しい御批評と御意見を寄せいただければ有難いことに存じます。

「藤田」

ひとむれ教育特集号

通巻 三五三号

発行 北海道家庭学校
 発行人 藤田俊二
 印刷 速軽町 北東社

昭和四十七年四月一日

資料7-1

寮長20年の区切りに、あらためて「記録」することについて、先人の歩みにふれつつみずから振り返る。また、少年たちに「日記」を書かせることの意義についてふれる。

「寮長二十年のくぎり」

北海道家庭学校

藤田俊二

昭和三十八年に北海道家庭学校に転じてきた間、二十一年が過ぎ去りました。

手探りで仕事のなかから自分なりに一つ又一つと積み重ねたものを振り返りつつ、今その一つ一つを検証しながら、ここからの自分の仕事の方がよいが、いいと思ひ、取之て発表させていただきます。

(一) 記録を書き続ける

教護院の教ある仕事の中の一つに「行動観察記録」があります。児童の行動を観察し、記録する。という言葉の前で私は二年ばかり思い悩みました。

何故記録するのか？ 記録してどうなるのか？

か？ という根本的な疑問に加えて、微妙に、たおやかに変化し成長して行く一人一人の相異なるパーソナリティの「陰影」を果たして記録し得るのかという思いが胸中を去来し、私は様々な方法を思索しては腕組みし続けました。様々な項目を作り、その一つ一つに〇×をつけていく方法もやってみましたし、主要な項目をあげて五段階評価する甚だ教率的なこともやってみました。が、学期毎の成績評価はそれだけではいけません、日毎の生活記録としてはいけません。無味乾燥であるばかりではなく、一人の少年の短所弱点を残葉末節をあげつらうて行くだけの攻撃記録又は事件記録に終始する危険を感じてやめました。

この様な時期に、私は二つの言に出会いました。

一つは、「教護」誌一三六号（昭和四十年五月）から連載された「汐風とてんぐ岩」であり、もう一つは「山鳩のうた」（昭和二十五年四月白鳳書院刊）であります。

資料7-2

「河風とてんぐ岩」は当時新道学園敬護でした西野勝久先生の書かれたものであり、山嶺のうた」は当時武蔵野学院の井上肇先生が書かれたものでありますが、前者からは一人一人の子供とその全体像のみをみずしごと、後者からは一人の少年にとことんかがわって岩手県山嶺に分け入って行く後姿に枚々の仕事の原因を教えられるのです。

私はこの二つの書からの啓示を執筆点にも、にも丹にも「まず書くこと」を昭和四十年七月八日から始めました。

書くことも最も苦手として来ただけに、三才からの見るに堪へない悪筆の「記録」らしきものを書き続けることは大度な苦行でした。しがし、十日、二十日、一ヶ月、六ヶ月、そして遂に一年書き続けることが出来てほっとしました。

一人一人の少年について、自分の眼で見たこと、家内の眼に触れたもの、他の先生方の何気ない言葉の教々に含まれているその少年の学校

我が卒業生

38年	0人	56年	7人
39	3	57	7
40	2	58	9
41	7		
42	6		
43	5	計	113人
44	4		
45	6		
46	7		
47	4		
48	7		
49	5		
50	7		
51	5		
52	5		
53	6		
54	5		
55	6		

どの、山での、畑での得年不得年の姿態言葉
 明暗の表情、喜怒の笑声怒声の教々に、夜には
 ってからじっと思ひ出して書き続けました。
 そして、書き続けるの中から一人一人の人物
 の様なもの、得意としていたものが、絶対に
 触れて欲しくない夕アリの様なものか、それを
 保持する希望の様なもの、薄ぼんやりと見えて
 くる様になり、秀之乃から書き、書き乃から秀
 之乃仕事私の主たる仕事になりました。
 この様な年月の中から、私の寮から一三人
 の少年が登って行きました。

資料7-3

今、発つて行った一人一人の記録を誦み返しなから、その子への自分の対応が果して適切であつたのか？ 彼は家庭学校での生活をどう考へていたのだから？、あの時の対応は間違つていたな。あの時に殴りつけたのはやむを得なかつた。等々様々な反省が日かたつた故の落ちついた気持で出来。その反省を今の暮らしに生かしながら進めたすうに書き纏めていきます。

更に、昭和四五年からそれ迄一冊の日記として少年たちが書いていた日記も、一枚づつの日記として私の手許に保存する事になりました。

一冊の日記を自分が持つて書くという事は、お互いに生活の間は切り合ひはない自分の物も他人の物も混同しがちな寮集団の中では、いつでも他人の眼にさらけ出される、いつでも誰かに誦まれるという大きなリスクがあつて、日記はいつの間にか差し障りのないとりとめのない朝は六時に起きました。調だけの文章になりがちです。

つきつめて考えれば、日記とは本来他人に誦

ませるものでもなく、他人が誦むものでもないという事は自明の理であり、私は一人一人が毎日書く文を「一日の作文」と考へることにして書かせることにしました。

この様にしてから一人一人の書く日記の内容が明らかになって来たことに随日しながら、その作文一枚を私が毎日書き纏めていく記録の上に貼付するという作業を加えて今日に至っています。

「日記指導」「作文指導」は小学校中学校でも大きな教育課題であり、すぐれた研究成果や実践が多く発表されていきます。

それらに出来る限り眼を通し、勉強させていただきながら、或る時には課題を出し、或る時には耳許で小さく囁やきながらその子のホンネをささぐって来ました。

二四時間一語に暮しているから解る一人一人の心の動きと表情、集団の流れと集団の度標軸の変化の移り変り、一人一人の遠い将来の希望と今現在の希望と不満、家族への思いの深淺、

資料7-4

故郷の友達、今の仲間との様々はトウグル等々を、別々に持つて来る一人一人の作文から成る程度看取出来る様になりました。

そして書いた本人がすっかり忘れてしまった頃に、家族のことや友達のことをよりけなく話しかけながら将来の希望につながる就職の話などをすると、本人は魔法にかかった様にまじまじと私を見つめながら私の掌中のペースに入ってくる様になります。

他人の悪口や批判ばかり書いてくる少年も、十日もたてば種がつきて別の事を書き始めます。身節が変り始めると書く為の素材を周囲の森に向ける様になり、森での畑での仕事を生き生きと書き始めるのも安心です。

自分 他人 勉強 仕事 将来の希望 一つ又一つと鮮明になってくると身節はその子の弟に早く巡る様になり、私は私でこの子をどんなかたちで社会に還元させるかの懸案にハリます。

これらの毎日の経過も可能な限り詳しく書いていくのが私の仕事であり、今の私にとっては今の十四人の少年たちと暮らすこと、毎日の作文を読むこと、そして十四人のことを書き続けるからその将来の道筋考えるのが不離一体であり、生活のすべてであります。

(二)長所を採り出す日々
 私共の家庭学校を創設した留岡幸助先生はその機関紙「人道」一六号(大正四年)に次の様に書いています。

「**感化の真諦**
 自分が昨今経営中なる北海道サアノチの家庭学校農場には、目下四人の生徒が居る。其の内二人は、鯉嶋の本教から来たもので、一人は某訓育院からと、今一人は東京から新たに来たものとである。

東京から来たものは、日尚浅いから、能くその性向を知る事が出来ないが、他の三人は、三四日の間、寝食を共にしたので、先ず大體の

資料8

退職の1年前。全体への目配りが行き届いている。藤田はこの時石上館寮長職を退き、教務部長を担当していた。

後記

平成四年度の収穫感謝号をおとどけます。

山林部、酪農部、蔬菜部、木工部、園芸部、工作部、醸造部、土木部、どの部も作業班としての日数は去年より更に少なくなつて二十六日前後になつていますが、この辺の日数を底として、家庭学校の伝統である作業班を維持して行く見通しがついて来て、むしろ非常に明るい気持ちで新年を迎えています。

寮の集団を横の軸とするなら、学級の集団と作業班の集団は全校を縦断してのより大きい縦軸、そのバランスが相拮抗して来て充実した果実がなり始めて来ました。

子供たちが寮での暮しを、遊びを謳歌し、学級での学習に真剣に身を入れ始め、サッカー、野球、バスケット、陸上、木工クラブ等々のクラブ活動に嬉々として参加し、それ故に価値の増して来た作業班に生き生きと加わる姿がこの夏から特に安定したものになつて来た和我々は共通して認識し始めています。

社会の内田稔先生、書道と硬筆の井上祐光先生、英語の松田房枝先生、美術の福地利香先生、音楽の木谷三三先生という重厚且つ若々しい非常勤の先生方の素晴らしい授業に加えて、全クラスを数学と国語の二系統八クラスに編成替えをして、その時々の授業時間に学習道具を手に持ち直して教室を移動する様子には、今迄の家庭学校にはなかった新鮮な学習への意欲が満ちあふれています。

これらの学習活動をすべて段取りし、遠軽地区中学校進路指導連絡会議にも出席しながら「高校へ行ける子は一人でも高校へ入れる様にすべしです」とこつこつと実績を積み重ねている川西康裕教護の努力にも又深く敬服するものがあります。

私共は、これらすべて「子供の進歩と幸せにつらなる」ことを収穫として祝う新しい感謝祭を迎え始めたのです。

この軌道はもう変えることはないし、後もどりの議論や無意味な懐旧談はすべきではありません。

若い渡辺教護が木工クラブで製作を始めた「カヌー」は全長四・七米、ゆうに大人二名、子供二名が乗れるというカヌーが来年夏には完成します。

進水式は湧別川かサロマ湖、山林四七三町を持つ家庭学校に新しく展げ始めたロマンは限りない可能性を見せ始めているのです。

週四十二時間労働と週休二日制の論議が教護院の現場をもひたひたと変え始めようとしている様子を遠望しながら、月に「土・日」一回だけの休みしかとっていない我々は、なんとか後一回とれたら有難いとは思いつつもそれ以上の休みはいらないう線で全職員が統一されている様な気がします。

我々の仕事から「アウト・サイダー」からイン・サイダーへ子供たちを送りこんでいくロマン」がなくなつたら終りだからです。

労働時間と休日論議から伝わってくるロマン不在こそ教護界全体で論議すべきです。

最後に、いつもながらに年末の忙しい忙しさの中で頑張つて下さった「ホクター印刷」の皆さんと内田稔さん、この「ひとむれ収穫感謝号」と並行して「非行問題一九九号」の印刷と発行にも気合を入れて頑張つて下さっている事に心から感謝の意を表する次第です。

「藤田」

別記

藤田俊二日誌 一覧

整理番号	入校年月日、一部に転寮年月日	卒業、退校、転寮年月日	日誌の分冊状況	備考
0-1	1963.4.23	1965.10.3	日誌作成せず。	向陽寮で、引き継ぐ。
0-2	1958.6.16	1964.4.10	日誌作成せず。	向陽寮で、引き継ぐ。
0-3	1962.2.22	1965.4.5	日誌作成せず。	向陽寮で、引き継ぐ。
0-4	1963.4.19	1966.2.22	日誌作成せず。	向陽寮で、引き継ぐ。 卒業。
0-5	1961.2.17	1966.10.5	日誌作成せず。	向陽寮で、引き継ぐ。 東京就職。
0-6	1958.10.7	1964.9.12	日誌作成せず。	向陽寮で、引き継ぐ。
0-7	1964.10.9入校 1966.10.28	1967.10.9	日誌作成せず。	柏葉寮より 石上館へ転出。
0-8	1963.10.21	1966.2.22	日誌作成せず。	転寮。卒業
0-9	1964.3.6	1967.4	日誌作成せず。	転寮。卒業。
0-10	1964.8.20入校 1966.3.13	1967.3.2	日誌作成せず。	掬泉寮より 石上館へ転出。卒業。
0-11	1960.6.20	1966.9.12	日誌作成せず。	転寮。
0-12	1964.9.8	1966.4.15	日誌作成せず。	卒業。
0-13	1965.3.2	1967.5.6	日誌作成せず。	
0-14	1966.7.26	1969.4.10	日誌作成せず。	
0-15	1964.10.12	1966.7.12	日誌作成せず。	平和寮へ転出。
0-16	1965.12.14	1966.8.29	日誌作成せず。	楽山寮へ転出。
0-17	1964.12.17	1968.2.14	日誌作成せず。	

1	1965.10.20	1967.10.22	7冊 第1分冊、1965.10.20～1966.2.22 第2分冊、1966.2.23～1966.5.2 第3分冊、1966.5.3～1966.12.6 第4分冊、1966.12.7～1967.4.10 第5分冊、1967.4.11～1967.6.17 第6分冊、1967.6.18～1967.9.18 第7分冊、1967.9.19～1967.10.22	第1冊は「**君行動記録」と題す。** 箇所は少年氏名。
2	1965.11.25	1968.5.4	7冊 第1分冊、1965.11.25～1966.2.1 第2分冊、1966.2.2～1966.5.5 第3分冊、1966.5.6～1966.11.3 第4分冊、1966.11.4～1967.1.28 第5分冊、1967.1.29～1967.10.8 第6分冊、1967.10.8～1968.2.18 第7分冊、1968.2.19～1968.5.4卒業	
3	1966.3.12	1968.3.25	5冊 第1分冊、1966.3.12～1966.6.26 第2分冊、1966.6.27～1966.11.17 第3分冊、1966.11.18～1967.7.14 第4分冊、1967.7.15～1967.12.30 第5分冊、1967.12.31～1968.3.25卒業	
4	1966.5.31	1967.8.26	4冊 第1分冊、1966.5.31～1966.10.29 第2分冊、1966.10.30～1967.3.30 第3分冊、1967.3.30～1967.7.7 第4分冊、1967.7.8～1967.8.26	掬泉寮へ転出。
5	1966.7.12	1970.3.13	12冊 第1分冊、1966.7.12～1966.10.18 第2分冊、1966.10.19～1967.1.27 第3分冊、1967.1.28～1967.7.6 第4分冊、1967.7.7～1967.11.27 第5分冊、1967.11.28～1968.5.11 第6分冊、1968.5.12～1968.8.8 第7分冊、1968.8.9～1968.12.7 第8分冊、1968.12.8～1969.3.7 第9分冊、1969.3.8～1969.6.28 第10分冊、1969.6.29～1969.10.18 第11分冊、10.19～1970.1.30 第12分冊、1970.1.31～1970.3.13	『もうひとつの少年期』で「郷田」。
6	1966.8.28	1968.8.1	4冊 第1分冊、1966.8.28～1966.12.28 *大学ノート 第2分冊、1966.12.29～1967.10.24 *リングノート 第3分冊、1967.10.25～1968.4.15 第4分冊、1968.4.16～1968.8.1	
7	1966.9.2	1970.4.9	4冊 第1分冊、1966.9.2～1967.1.25 第2分冊、1967.1.26～1967.10.3 第3分冊、1969.9.10～1969.12.17	

			<p>*「平和寮より戻って」と表紙に記載 第4分冊、1969.12.18～1970.4.9卒業 日誌末尾に以下の記載。「明、暗、明、暗、明々、様々な紆余曲折の末に漸く辿り着いた卒業までの永い道！一時どうなるかと辛い思いだったのだが。とにかく3年7ヶ月の家庭学校の生活は経ったのだ。これからは登の望んだ海の男の生活が始まる。頑張れよ！」。</p>	
8	1966.9.30	1969.8.2	<p>9冊 第1分冊、1966.9.30～1967.2.4 第2分冊、1967.2.5～1967.10.2 第3分冊、1967.10.3～1968.2.18 第4分冊、1968.2.19～1968.6.1 第5分冊、1968.6.2～1968.9.8 第6分冊、1968.9.9～1968.12.17 第7分冊、1968.12.18～1969.4.8 第8分冊、1969.4.9～1969.7.12 第9分冊、1969.7.13～1969.8.2卒業</p>	
9	1967.2.16	1969.12.25	<p>7冊 第1分冊、1967.2.16～1967.6.29 第2分冊、1967.6.30～1967.12.20 第3分冊、1967.12.21～1968.6.28 第4分冊、1968.6.29～1968.11.3 第5分冊、1968.11.4～1969.4.5 第6分冊、1969.4.6～1969.8.10 第7分冊、1969.8.11～1969.12.25</p>	『もうひとつの少年期』で「水木」。
10	1967.6.24	1970.3.14	<p>8冊 第1分冊、1967.6.24～1967.11.5 第2分冊、1967.11.6～1968.4.24 第3分冊、1968.4.25～1968.9.8 第4分冊、1968.9.9～1969.1.28 第5分冊、1969.1.30～1969.6.4 第6分冊、1969.6.5～1969.10.22 第7分冊、1969.10.23～1970.1.30 第8分冊、1970.1.31～1970.3.14</p>	
11	1967.10.18	1970.4.9	<p>10冊 第1分冊、1967.10.18～1968.1.17 第2分冊、1968.1.18～1968.3.19 第3分冊、1968.3.20～1968.6.14 第4分冊、1968.6.15～1968.9.6 第5分冊、1968.9.7～1968.12.7 第6分冊、1968.12.8～1969.2.14 第7分冊、1969.2.15～1969.5.19 第8分冊、1969.5.20～1969.9.30 第9分冊、1969.10.1～1970.1.17 第10分冊、1970.1.19～1970.4.9</p>	
12	1967.12.29	1970.3.10	<p>7冊 第1分冊、1967.12.29～1968.6.11 第2分冊、1968.6.12～1968.10.15 第3分冊、1968.10.16～1969.2.14 第4分冊、1969.2.15～1969.5.14 第5分冊、1969.5.15～1969.8.21</p>	

			第6分冊、1969.8.22~1969.11.22 第7分冊、1969.11.23~1970.3.10	
13	1968.8.7	1971.9.20	8冊 第1分冊、1968.8.7~1968.12.17 第2分冊、1968.12.18~1969.5.14 第3分冊、1969.5.15~1979.11.1 第4分冊、1969.11.2~1970.4.16 第5分冊、1970.4.18~1970.8.27 第6分冊、1971.8.28~1971.3.21 第7分冊、1971.3.22~1971.8.21 第8分冊、1971.8.22~1971.9.20卒業 日誌末尾に以下の記載。「…***(13)よ。社会の生活は厳しいけれど、照なら心配ないと僕は確信している。辛いことがあっても照なら耐えていこう、きっと。仕事はいろいろ変わるだろう！また変って当然だ。**(13)の笑顔と人格をわかってくれる人達の中で人生が定着するはずだ。頑張れよ！1971.9.21夜記」。	
14	1968.9.13	1971.11.13	10冊 第1分冊、1968.9.13~1968.12.25 第2分冊、1968.12.26~1969.4.8 第3分冊、1969.4.9~1969.8.5 第4分冊、1969.8.6~1969.12.12 第5分冊、1969.12.13~1970.4.20 第6分冊、1970.4.21~1970.12.3 第7分冊、1970.12.4~1971.4.27 第8分冊、1971.4.28~1971.8.21 第9分冊、1971.8.22~1971.11.2 第10分冊、1971.11.3~1971.11.13卒業	
15	1968.10.9	1970.6.29	6冊 入校1968.4.14~1968.10.8までの日誌未確認。 1968年4月14日入校 第1分冊、1968.10.9~1969.2.2 第2分冊、1969.2.3~1969.5.14 第3分冊、1969.5.15~1969.8.28 第4分冊、1969.8.29~1969.12.6 第5分冊、1969.12.7~1970.4.17 第6分冊、1970.4.18~1970.6.29卒業	
16	1968.11.7	1971.3.11	7冊 第1分冊、1968.11.7~1969.2.20 第2分冊、1969.2.21~1969.6.19 第3分冊、1969.6.20~1969.10.21 第4分冊、1969.10.22~1970.3.25 第5分冊、1970.3.26~1970.7.7 第6分冊、1970.7.8~1970.12.29 第7分冊、1970.12.30~1971.3.11卒業	『もうひとつの少年期』で「高田」。
17	1968.12.7	1971.4.5	6冊 第1分冊、1968.12.7~1969.4.18 第2分冊、1969.4.19~1969.9.4 第3分冊、1969.9.5~1970.2.1 第4分冊、1970.2.2~1970.7.3 第5分冊、1970.7.4~1971.1.16 第6分冊、1971.1.17~1971.4.5	

18	1969.6.7	1971.8.13	6冊 第1分冊、1969.6.7～1969.9.20 第2分冊、1969.9.29～1970.3.21 第3分冊、1970.3.22～1970.7.26 第4分冊、1970.7.27～1971.2.17 第5分冊、1971.3.4～1971.8.1 第6分冊、1971.8.2～1971.8.13卒業	
19	1969.8.15	1971.4.3	6冊 第1分冊、1969.8.15～1969.11.27 第2分冊、1969.11.28～1970.4.7 第3分冊、1970.4.8～1970.7.6 第4分冊、1970.7.7～1970.12.12 第5分冊、1970.12.13～1971.3.22 第6分冊、1971.3.23～1971.4.3	
20	1969.10.18	1973.4.1	8冊 第1分冊、1969.10.18～1970.1.16 第2分冊、1970.1.17～1970.6.7 第3分冊、1970.6.8～1970.12.11 第4分冊、1970.12.12～1971.5.5 第5分冊、1971.5.6～1971.9.17 第6分冊、1971.9.18～1972.1.24 第7分冊、1972.1.25～1972.11.2 第8分冊、1973.1.5～1973.4.1卒業	
21	1969.12.7	1972.4.27	6冊 第1分冊、1969.12.17～1970.5.17 第2分冊、1970.5.19～1970.12.25 第3分冊、1970.12.26～1971.5.23 第4分冊、1971.5.24～1971.10.8 第5分冊、1971.10.9～1972.2.21 第6分冊、1972.2.22～1972.4.27卒業	
22	1970.3.30	1972.4.11	5冊 第1分冊、1970.3.30～1970.6.29 第2分冊、1970.6.30～1971.1.11 第3分冊、1971.1.12～1971.6.18 第4分冊、1971.6.19～1971.10.19 第5分冊、1971.10.20～1972.4.11	
23	1970.4.17	1971.11.9	4冊 第1分冊、1970.4.17～1970.8.16 第2分冊、1970.8.17～1971.2.17 第3分冊、1971.2.18～1971.7.23 第4分冊、1971.7.26～1971.11.9	
24	1970.7.28	1972.4.26	6冊 第1分冊、1970.7.28～1970.12.24 第2分冊、1970.12.25～1971.4.4 第3分冊、1971.4.5～1971.7.15 第4分冊、1971.7.16～1971.10.19 第5分冊、1971.10.20～1972.3.14 第6分冊、1972.3.22～1972.4.26卒業	
25	1970.11.26	1972.4.26	4冊 第1分冊、1970.11.26～1971.4.19 第2分冊、1971.4.20～1971.8.23	平和寮へ転出。

			第3分冊、1971.8.25～1971.11.19 第4分冊、1971.11.20～1972.4.26	
26	1971.1.7	1973.4.1	5冊 第1分冊、1971.1.7～1971.4.17 第2分冊、1971.4.18～1971.9.16 第3分冊、1971.9.17～1971.12.15 第4分冊、1971.12.16～1972.12.27 第5分冊、1973.1.10～1973.4.1卒業	
27	1971.4.16	1975.3.28	8冊 第1分冊、1971.4.16～1971.8.11 第2分冊、1971.8.12～1971.11.2 第3分冊、1971.11.3～1972.9.3 第4分冊、1972.9.4～1973.3.27 第5分冊、1973.3.28～1973.9.19 第6分冊、1973.9.20～1974.1.21 第7分冊、1974.1.22～1974.6.5 第8分冊、1974.6.8～1975.3.28	
28	1971.5.17	1975.3.28	6冊 第1分冊、1972.5.17～1972.10.14 第2分冊、1972.10.15～1973.6.12 第3分冊、1973.6.26～1973.11.18 第4分冊、1973.11.19～1974.3.26 第5分冊、1974.3.27～1974.10.5 第6分冊、1974.10.14～1975.3.28卒業	
29	1971.6.21	1973.4.2	3冊 第1分冊、1971.6.21～1971.10.19 第2分冊、1971.10.20～1972.9.5 第3分冊、1972.9.6～1973.4.2卒業	
30	1971.8.20	1973.5.16	4冊 第1分冊、1971.8.20～1971.11.14 第2分冊、1971.11.15～1972.9.28 第3分冊、1972.9.29～1973.4.7 第4分冊、1973.4.8～1973.5.16卒業	
31	1971.9.28	1973.5.19	4冊 第1分冊、1971.9.28～1972.2.18 第2分冊、1972.2.19～1972.9.4 第3分冊、1972.9.6～1973.3.2 第4分冊、1973.3.3～1973.5.19卒業 * 姉との写真に「5.16に初めてきた姉さんの便りに同封されていた幼い頃の写真。こんなにも明るく無邪気だったのに」と添え書きされている。	
32	1971.11.18	1973.4.11	3冊 第1分冊、1971.11.18～1972.9.7 第2分冊、1972.9.6～1973.3.29 第3分冊、1973.3.30～1973.4.11卒業 * 「1年間を振り返って」便箋4枚	
33	1971.12.1	1977.3.14	16冊 第1分冊、1971.12.1～1972.10.1 第2分冊、1972.10.2～1973.4.16 第3分冊、1973.4.17～1973.9.18	

			<p>第4分冊、1973.9.19～1974.1.12 第5分冊、1974.1.13～1974.6.21 第6分冊、1974.6.22～1975.1.24 第7分冊、1975.1.25～1975.6.10 第8分冊、1975.6.11～1975.10.10 第9分冊、1975.10.11～1975.12.16 第10分冊、1975.12.17～1976.2.23 第11分冊、1976.2.24～1976.4.26 第12分冊、1976.4.27～1976.6.30 第13分冊、1976.7.1～1976.9.8 第14分冊、1976.9.9～1976.11.25 第15分冊、1976.11.26～1977.1.28 第16分冊、1977.1.29～1977.3.14卒業</p>	
34	1972.2.26	1974.3.17	<p>5冊 第1分冊、1972.2.26～1972.10.19 *『輪』創刊号1972.7.10発行人藤田 第2分冊、1972.10.20～1973.6.9 第3分冊、1973.6.10～1973.10.21 第4分冊、1973.10.22～1974.2.21 第5分冊、1974.2.28～1974.3.17卒業して復学</p>	
35	1972.5.1	1976.3.8	<p>11冊 第1分冊、1972.5.1～1972.9.28 第2分冊、1972.9.29～1973.3.3 第3分冊、1973.3.4～1973.8.18 第4分冊、1973.8.19～1973.11.24 第5分冊、1973.11.25～1974.3.11 第6分冊、1974.3.12～1974.9.13 第7分冊、1974.9.14～1975.2.20 第8分冊、1975.2.21～1975.6.22 第9分冊、1975.6.23～1975.10.24 第10分冊、1975.10.25～1976.1.11 第11分冊、1976.1.1～1976.3.8</p>	
36	1972.7.19	1975.4.25	<p>6冊 第1分冊、1972.7.19～1973.1.30 第2分冊、1973.1.31～1973.7.9 第3分冊、1973.7.10～1973.12.3 第4分冊、1973.12.4～1974.5.3 第5分冊、1974.5.4～1974.12.24 第6分冊、1974.12.25～1975.4.25卒業</p>	
37	1972.6.23	1974.6.6	<p>5冊 第1分冊、1972.6.23～1973.11.4 第2分冊、1973.1.5～1973.7.11 第3分冊、1973.7.19～1973.12.3 第4分冊、1973.12.4.～1974.4.20 第5分冊、1974.4.21～1974.6.6卒業</p>	
38	1972.10.6	1975.4.25	<p>6冊 第1分冊、1972.10.6～1973.5.31 第2分冊、1973.6.1～1973.10.8 第3分冊、1973.10.9～1974.1.23 第4分冊、1974.1.24～1974.5.24 第5分冊、1974.5.24～1975.1.7 第6分冊、1975.1.8～1975.4.25</p>	

39	1973.4.23	1974.9.9	4冊 第1分冊、1973.4.23～1973.9.9 第2分冊、1973.9.10～1974.2.1 第3分冊、1974.2.2～1974.7.21 第4分冊、1974.7.30～1974.9.9卒業	
40	1973.5.18	1975.5.3	5冊 第1分冊、1973.5.18～1973.9.19 第2分冊、1973.9.20～1974.1.19 第3分冊、1974.1.10～1974.5.18 第4分冊、1974.5.19～1974.12.11 第5分冊、1974.12.12～1975.5.3卒業	
41	1973.7.30	1974.10.6	4冊 第1分冊、1973.7.30～1973.10.31 第2分冊、1973.11.1～1974.2.17 第3分冊、1974.2.18～1974.7.5 第4分冊、1974.7.6～1974.10.10	
42	1973.10.25	1975.9.7	6冊 第1分冊、1973.10.25～1974.2.6 第2分冊、1974.2.7～1974.6.24 第3分冊、1974.6.25～1974.12.24 第4分冊、1974.12.25～1975.5.7 第5分冊、1975.5.8～1975.8.19 第6分冊、1975.8.20～1975.9.7卒業	
43	1973.12.25	1977.3.14	10冊 第1分冊、1973.12.25～1974.4.24 第2分冊、1974.4.25～1975.1.10 第3分冊、1975.1.11～1975.6.5 第4分冊、1975.6.6～1975.1.19 第5分冊、1975.10.20～1976.1.31 第6分冊、1976.2.1～1976.4.6 第7分冊、1976.4.7～1976.6.30 第8分冊、1976.7.1～1976.9.20 第9分冊、1976.9.27～1976.12.18 第10分冊、1976.12.19～1977.3.14卒業	
44	1974.2.15	1976.3.13	4冊 第1分冊、1975.5.13～1975.8.31 洗心寮より転入 第2分冊、1975.9.1～1975.12.6 第3分冊、1975.12.7～1976.2.6 第4分冊、1976.2.7～1976.3.13卒業 日誌末尾に「再非行の心配は90%ない」と朱筆。	
45	1974.3.7	1976.2.15	7冊 第1分冊、1974.3.7～1974.7.22 第2分冊、1974.7.30～1975.2.21 第3分冊、1975.2.22～1975.6.16 第4分冊、1975.6.17～1975.10.9 第5分冊、1975.10.10～1975.12.11 第6分冊、1975.12.12～1976.2.7 第7分冊、1976.2.8～1976.2.15	
46	1974.7.24	1980.3.24	14冊 第1分冊、1974.7.24～1975.1.25	川崎に就職。

			<p>第2分冊、1975.1.26～1976.6.2 第3分冊、1975.6.3～1975.9.23 *「日記9.13-9.19」洗心寮で書いた日記 第4分冊、1975.9.24～1975.12.12 第5分冊、1975.12.13～1976.2.14 *51年正月帰省中の日記再入校 第6分冊、1976.11.30～1978.2.4 第7分冊、1978.2.5～1978.4.5 第8分冊、1978.4.16～1978.7.5 第9分冊、1979.7.6～1980.9.12 第10分冊、1978.11.21～1979.2.7 第11分冊、1979.2.8～1979.5.3 第12冊、1979.5.4～1979.9.11 第13冊、1979.9.12～1980.1.20 第14冊、1980.1.21～1980.3.24 日誌末尾に以下の記載。「永い間お世話になりました」とびよこんと頭を下げて** (46) が発って行った。なんだかぼかんと淋しい一日！<u>再非行など絶対無い！</u>」（下線部朱筆）。</p>	
47	1974.9.12	1976.3.1	<p>5冊 第1分冊、1974.9.12～1975.2.13 第2分冊、1975.2.14～1975.6.21 第3分冊、1975.6.22～1975.10.23 第4分冊、1975.10.24～1976.1.15 第5分冊、1976.1.16～1976.3.1</p>	
48	1974.11.7	1975.4.16	<p>2冊 第1分冊、1974.11.7～1975.2.13 第2分冊、1975.2.14～1975.4.16</p>	
49	1974.12.18	1976.6.5	<p>6冊 第1分冊、1974.12.18～1975.5.8 第2分冊、1975.5.9～1975.8.30 第3分冊、1975.8.31～1975.12.3 第4分冊、1975.12.4～1976.2.21 第5分冊、1976.2.22～1976.5.14 第6分冊、1976.5.15～1976.6.5</p>	平和寮へ転出。
50	1975.4.17	1978.5.18	<p>15冊 第1分冊、1975.4.17～1975.5.31 第2分冊、1975.6.1～1975.9.1 第3分冊、1975.9.2～1975.12.3 第4分冊、1975.12.4～1976.12.18 第5分冊、1976.2.19～1976.4.30 第6分冊、1976.5.1～1976.7.7 第7分冊、1976.7.8～1976.10.1 第8分冊、1976.9.30～1976.12.13 第9分冊、1976.12.14～1977.2.26 第10分冊、1977.2.27～1977.2.17 第11分冊、1977.5.18～1977.8.8 第12分冊、1977.8.9～1977.10.30 第13分冊、1977.10.31～1978.2.3 *「長芋掘りの図」 第14分冊、1978.2.4～1978.4.8 第15分冊、1978.4.9～1978.5.18卒業就職 *「卒業を前にして」B4/8枚</p>	

51	1975.5.23	1978.2.24	7冊 第1分冊、1975.5.23～1975.10.6 第2分冊、1975.10.7～1976.2.1 第3分冊、1976.2.2～1976.3.31 第4分冊、1976.4.1～1976.6.13 第5分冊、1976.6.14～1976.8.23 第6分冊、1976.8.24～1976.11.10 第7分冊、1976.11.11～1977.2.24	平和寮へ転出。
52	1975.6.5	1977.4.5	9冊 第1分冊、1975.6.5～1975.8.28 第2分冊、1975.8.29～1975.12.26 第3分冊、1976.1.6～1976.2.26 第4分冊、1976.2.27～1976.5.8 第5分冊、1976.5.9～1976.6.30 第6分冊、1976.7.1～1976.9.11 第7分冊、1976.9.12～1976.11.6 第8分冊、1976.11.7～1977.2.5 第9分冊、1977.2.6～1977.4.5卒業	
53	1975.7.29	1977.4.20	8冊 第1分冊、1975.7.29～1975.10.28 第2分冊、1975.10.29～1976.2.1 第3分冊、1976.2.2～1976.3.23 第4分冊、1976.3.24～1976.6.8 第5分冊、1976.6.9～1976.8.23 第6分冊、1976.8.24～1976.11.1 第7分冊、1976.11.2～1977.2.6 第8分冊、1977.2.7～1977.4.20卒業	
54	1975.9.3	1979.3.31	19冊 第1分冊、1975.9.3～1975.11.12 第2分冊、1975.11.13～1976.1.23 第3分冊、1976.1.23～1976.3.20 第4分冊、1976.3.21～1976.5.4 第5分冊、1976.5.5～1976.6.25 第6分冊、1976.6.26～1976.8.18 第7分冊、1976.8.19～1976.10.25 第8分冊、1976.10.26～1976.12.28 第9分冊、1976.12.29～1977.3.20 第10分冊、1977.3.21～1977.5.22 第11分冊、1977.5.23～1977.7.8 第12分冊、1977.7.9～1977.9.22 第13分冊、1977.9.23～1977.12.11 第14分冊、1977.12.12～1978.3.19 第15分冊、1978.3.20～1978.6.11 第16分冊、1978.6.12～1978.8.25 第17分冊、1978.8.26～1978.11.10 第18分冊、1978.11.11～1979.1.29 第19分冊、1979.1.30～1979.3.31卒業 「卒業を前にして自分が今言える事」B4.400字原稿用紙5枚	
55	1975.10.9	1977.8.9	10冊 第1分冊、1975.10.9～1976.1.1 第2分冊、1976.1.2～1976.2.24 第3分冊、1976.2.25～1976.4.26	

			<p>第4分冊、1976.4.27～1976.6.22 第5分冊、1976.6.23～1976.9.8 第6分冊、1976.9.9～1976.12.10 第7分冊、1976.12.11～1977.3.17 第8分冊、1977.3.18～1977.5.20 第9分冊、1977.5.21～1977.7.25 第10分冊、1977.7.26～1977.8.9卒業</p>	
56	1976.3.29	1978.4.10	<p>9冊 第1分冊、1976.3.29～1976.6.10 第2分冊、1976.6.11～1976.9.2 第3分冊、1976.9.3～1976.11.24 第4分冊、1976.11.25～1977.3.5 第5分冊、1977.3.6～1977.6.17 第6分冊、1977.6.18～1977.9.30 第7分冊、1977.10.1～1978.1.15 第8分冊、1978.1.10～1978.3.29 第9分冊、1978.3.30～1978.4.10卒業就職 日誌末尾に以下の記載。「…仕事をするこゝでは絶対に人にひけをとらない安藤だ！ゆっくりゆっくりと豊潤な人格に向かっていくと思っているよ。僕は再非行の心配は100%なしと見ている。体を大切に、しっかりと頑張れよ！どこかに自分の旗を挙げるまで頑張れよ。…」4.10</p>	
57	1976.6.21	1978.4.11	<p>8冊 第1分冊、1976.6.21～1976.8.20 第2分冊、1976.8.21～1976.10.20 第3分冊、1976.10.21～1977.2.11 第4分冊、1977.2.12～1977.5.23 第5分冊、1977.5.24～1977.9.4 第6分冊、1977.9.5～1977.12.6 第7分冊、1977.12.7～1978.3.24 第8分冊、1978.3.25～1978.4.11卒業就職 日誌末尾に以下の記載。「…僕は再非行の心配などは100%絶対ないと思っている。自分のペースで、マイペースで仕事をしていけば、君なら釧路運輸の経営にも参加できる人だ。ゆっくりゆっくり頑張れよ。君と暮らした1年10ヶ月、51年の9月から10月の秋に煙草のことで君を殴りつけた辛い思い出を切々と省みつつ、この記録を終る。1978.4.11夜起記藤田俊二」。</p>	
58	1976.7.14	1980.3.26	<p>15冊 第1分冊、1976.7.14～1976.9.17 第2分冊、1976.9.18～1976.11.24 第3分冊、1976.11.25～1977.1.15 第4分冊、1977.1.16～1977.4.10 第5分冊、1977.4.11～1977.7.6 第6分冊、1977.7.7～1977.10.13 第7分冊、1977.10.14～1978.2.8 第8分冊、1978.2.9～1978.4.29 第9分冊、1978.4.30～1978.7.22 第10分冊、1978.7.23～1978.10.23 第11分冊、1978.10.24～1979.2.7 第12分冊、1979.2.8～1979.5.8</p>	

			<p>「S.54.7.26読了寺崎」 第13分冊、1979.5.9～1979.9.15 第14分冊、1979.9.16～1980.1.27 日誌末尾に以下の記載。「再非行は98%ないとみる」 「** (59)と暮らした3年7ヶ月余の長かった年月を振り返りなんともいえない淋しい気分の夜だ」。 「55.4.5読了寺崎…」</p>	
59	1976.9.27	1978.3.15	<p>6冊 第1分冊、1976.9.27～1976.12.12 第2分冊、1976.12.13～1977.3.17 第3分冊、1977.3.18～1977.6.15 第4分冊、1977.6.16～1977.9.29 第5分冊、1977.9.30～1978.1.15 第6分冊、1978.1.16～1978.3.15卒業</p>	
60	1977.3.7	1980.6.25	<p>12冊 第1分冊、1977.3.7～1977.5.27 第2分冊、1977.5.28～1977.9.4 第3分冊、1977.9.5～1977.12.23 第4分冊、1977.12.24～1978.4.10 第5分冊、1978.4.11～1978.7.8 第6分冊、1978.7.9～1978.10.2 第7分冊、1978.10.3～1978.12.27 第8分冊、1978.12.28～1979.3.12 第9分冊、1979.3.13～1979.6.8 第10分冊、1979.6.9～1980.10.28 第11冊、1979.10.29～1980.2.28 第12冊、1980.2.29～1980.6.25</p>	
61	1977.4.26	1979.3.25	<p>9冊 第1分冊、1977.4.26～1977.6.28 第2分冊、1977.6.29～1977.10.10 第3分冊、1977.10.11～1977.12.22 第4分冊、1977.12.23～1978.3.25 第5分冊、1978.3.26～1978.6.26 第6分冊、1978.6.27～1978.9.12 第7分冊、1978.9.13～1978.12.12 第8分冊、1978.12.13～1979.2.6 第9分冊、1979.2.7～1979.3.25 卒業</p>	
62	1977.7.5	1978.5.9	<p>3冊 第1分冊、1977.7.5～1977.10.29 第2分冊、1977.10.30～1978.2.27 第3分冊、1978.2.28～1978.5.9</p>	平和寮へ転出。
63	1977.9.27	1978.9.8	<p>6冊 第1分冊、1977.9.27～1977.11.22 第2分冊、1977.11.23～1978.2.11 第3分冊、1978.2.12～1978.4.12 第4分冊、1978.4.13～1978.6.12 第5分冊、1978.6.13～1978.8.7 第6分冊、1978.8.8～1978.9.8卒業</p>	洗心寮より転入。
64	1977.9.28	1981.8.15	<p>13冊 第1分冊、第2分冊、第3分冊、所在未確認。 第4分冊、1978.6.29～1978.9.14 第5分冊、1978.9.15～1978.12.23</p>	

			第6分冊、1978.12.24～1979.3.16 第7分冊、1979.3.17～1979.8.4 第8分冊、1979.8.5～1979.12.18 第9分冊、1979.12.19～1980.4.8 第10分冊、1980.4.9～1980.8.22 第11分冊、1980.8.23～1980.12.22 第12冊、1980.12.23～1981.4.13 第13冊、1981.4.14～1981.8.15 * 「ひとむれ」第50巻第15号、谷昌恒「1980年正月」	
65	1977.10.20	1980.3.25	9冊 第1分冊、1977.10.20～1978.1.15 第2分冊、1978.1.16～1978.4.29 第3分冊、1978.4.30～1978.7.23 第4分冊、1978.7.24～1978.11.1 第5分冊、1978.11.2～1979.1.18 第6分冊、1979.1.19～1979.4.9 第7分冊、1979.4.10～1979.8.17 第8分冊、1979.8.18～1979.12.21 第9分冊、1979.12.22～1980.3.25 * 「ひとむれ」49巻11号、昭和53年10月1日、谷「平和山頂の式典」 * 「北海道家庭学校創立64周年記念式留岡清男記念碑除幕式」次第、昭和53年9月24日午後1時	寿司店に転職。
66	1977.11.17	1978.1.19	2冊 第1分冊、1977.8.22～1977.11.16 第2分冊、1977.11.17～1978.1.19	中学3年次、登校拒否で入校。公立中学校に復学。
67	1978.3.16	1980.3.26	7冊 第1分冊、1978.3.16～1978.6.23 第2分冊、1978.6.24～1978.9.22 第3分冊、1978.9.23～1978.12.8 第4分冊、1978.12.9～1979.3.2 第5分冊、1979.3.3～1979.6.1 第6分冊、1979.6.2～1979.10.21 第7分冊、1979.10.22～1980.3.26	千歳に就職。
68	1978.5.1	1979.3.25	4冊 第1分冊、1978.5.1～1978.7.19 第2分冊、1978.7.20～1978.10.15 第3分冊、1978.10.16～1979.1.29 第4分冊、1979.1.30～1979.3.25卒業	
69	1978.6.8	1980.4.14	6冊 第1分冊、1978.6.8～1978.9.6 (S.53.9.18読了 寺崎) 第2分冊、1978.9.7～1978.12.23 (12.28読了 寺崎) 第3分冊、1978.12.24～1979.3.21 (S.54.5.20了 寺崎) 「なんとさっぱりした性格でしょう」 第4分冊、1979.3.22～1979.8.6 第5分冊、1979.8.7～1979.12.17 第6分冊、1979.12.18～1980.4.14	旭川に就職。

70	1978.6.29	1982.3.28	11冊 第1分冊、1978.6.29～1978.9.25 第2分冊、1978.9.26～1979.1.25 第3分冊、1979.1.26～1979.4.23 第4分冊、1979.4.24～1979.9.15 第5分冊、1979.9.16～1980.2.7 第6分冊、1980.2.8～1980.6.25 第7分冊、1980.6.26～1980.11.2 第8分冊、1980.11.3～1981.3.13 第9分冊、1981.3.13～1981.7.22 第10分冊、1981.7.23～1981.12.25 第11分冊、1981.12.26～1982.3.28	幕別の中学校3年復学。
71	1978.9.20	1981.3.21	8冊 第1分冊、1978.9.20～1978.12.5 第2分冊、1978.12.6～1979.4.6 第3分冊、1979.4.7～1979.8.8 第4分冊、1979.8.9～1979.12.19 第5分冊、1979.12.20～1980.4.11 第6分冊、1980.4.12～1980.8.21 第7分冊、1980.8.22～1980.12.21 第8分冊、1980.12.22～1981.3.21就職 「それにしても** (71)よ、今日の朝礼の挨拶輝いていたぞ。『僕は2年6ヶ月頑張りました。世の中に出ても頑張ります。皆さんも頑張ってください』…ありきたりの社会人になれるかどうか？50%の心配があるだけに、今はただ萱場さんにひたすらお願いしていくしかない。とに角、ほけっとしないで、物を集めたり欲しがったりしないで、しっかりと頑張るんだぞ！** (71)1981.3.21夜 藤田」。	
72	1978.9.25	1979.1.23	3冊 第1分冊、1978.9.25～1978.11.7 第2分冊、1978.11.8～1979.1.10 第3分冊、1979.1.11～1979.1.23	
73	1979.1.15	1981.3.21	7冊 第1分冊、1979.1.15～1979.3.30 第2分冊、1979.3.21～1979.7.27 第3分冊、1979.7.28～1979.12.5 第4分冊、1979.12.6～1980.4.5 第5分冊、1980.4.6～1980.8.9 第6分冊、1980.8.10～1980.12.10 第7分冊、1980.12.11～1981.3.21就職	
74	1979.4.8	1979.12.26	3冊 第1分冊、1979.4.8～1979.5.26 第2分冊、1979.5.27～1979.9.22 第3分冊、1979.9.23～1979.12.26	東京に戻る。
75	1979.7.6	1980.11.6	4冊 第1分冊、1979.7.6～1979.11.19 第2分冊、1979.11.20～1980.4.8 第3分冊、1980.4.9～1980.8.25 第4分冊、1980.8.26～1980.11.6卒業就職 *第1冊の裏表紙に以下のメモ 「55.2.13読了 寺崎	

			54.8.21神様からの最大の贈りもの 人の善さを持った** (75) に私はほれほれました。今後の成長を祈ります。	
76	1979.9.21	1981.3.28	5冊 第1分冊、1979.9.21～1980.1.17 第2分冊、1980.1.18～1980.5.17 第3分冊、1980.5.18～1980.9.20 第4分冊、1980.9.21～1981.1.30 第5分冊、1981.1.31～1981.3.28 日誌末尾に以下の記載。「家出はあるかも知れない。だけど、再非行は100%ないであろう。そうだよなあ** (76) !」以上、朱筆。	「北見職訓建築科へ」。
77	1979.10.25	1981.1.17	4冊 第1分冊、1979.10.25～1980.3.6 第2分冊、1980.3.7～1980.7.13 第3分冊、1980.7.14～1980.11.12 第4分冊、1980.11.13～1981.1.17	
78	1980.2.26	1985.3.23	11冊 第1分冊、1980.2.26～1980.6.9 第2分冊、1980.6.10～1980.10.23 第3分冊、1980.10.24～1981.2.21 第4分冊、1981.2.22～1981.7.8 第5分冊、1981.7.9～1981.12.13 第6分冊、1981.12.14～1982.3.21 旭川市内の中学校1年に復学。第6分冊末尾に「**の復学の成否は <u>五分五分と見ている</u> 」と記載。枠内朱筆。 再入校1982年12月1日 第1分冊、1982.12.1～1983.4.1 第2分冊、1983.4.2～1983.8.28 第3分冊、1983.8.29～1983.9.1 *ノート表紙は「1983.8.29～1984.1.17～」 第4分冊、1984.1.17～1984.12.12 第5分冊、1984.12.13～1985.3.23	卒業札幌市料理店に就職。
79	1980.3.27	1981.6.4	4冊 第1分冊、1980.3.27～1980.7.22 第2分冊、1980.7.23～1980.11.19 第3分冊、1980.11.20～1981.3.24 第4分冊、1981.3.25～1981.6.4就職 「再非行の心配は100%ない」と赤のボールペンで大書。	
80	1980.5.29	1981.9.6	4冊 第1分冊、1980.5.29～1980.9.8 第2分冊、1980.9.9～1981.1.12 第3分冊、1981.1.13～1981.5.6 第4分冊、1981.5.7～1981.9.6卒業	「父の自営業を手伝うかたちで就職」。
81	1980.7.28	1982.3.15	5冊 第1分冊、1980.7.28～1980.10.27 第2分冊、1980.10.28～1981.2.22 第3分冊、1981.2.23～1981.6.17 第4分冊、1981.6.18～1981.10.27 第5分冊、1981.10.28～1982.3.15 転寮。1983.3.20退校	

82	1980.8.25	1982.3.31	5冊 第1分冊、1980.8.25～1980.12.20 第2分冊、1980.12.21～1981.4.15 第3分冊、1981.4.16～1981.8.10 第4分冊、1981.8.11～1982.1.15 第5分冊、1982.1.16～1982.3.31	
83	1980.11.20	1981.9.7	3冊 第1分冊、1980.11.10～1981.3.3 第2分冊、1981.3.4～1981.7.12 第3分冊、1981.7.13～1981.9.7	平和寮へ転出。
84	1981.1.22	1982.2.22	4冊 第1分冊、1981.1.22～1981.4.29 第2分冊、1981.4.30～1981.9.18 第3分冊、1981.9.9～1982.2.11 第4分冊、1982.2.12～1982.2.22卒業	
85	1981.3.12	1982.3.31	4冊 第1分冊、1981.3.12～1981.6.21 第2分冊、1981.6.22～1981.11.17 第3分冊、1981.11.18～1982.3.28 第4分冊、1982.3.29～1982.3.31	
86	1981.3.26	1982.3.15	3冊 第1分冊、1981.3.26～1981.7.5 第2分冊、1981.7.6～1981.12.6 第3分冊、1981.12.7～1982.3.15	
87	1981.5.20	1982.3.15	3冊 第1分冊、1981.5.20～1981.8.28 第2分冊、1981.8.29～1982.1.16 第3分冊、1982.1.17～1982.3.15	
88	1981.7.15	1983.3.15	2冊 第1分冊、1981.7.15～1981.12.13 第2分冊、1981.12.14～1983.3.15	
89	1981.8.11	1982.3.14	3冊 第1分冊、1981.8.11～1981.11.3 第2分冊、1981.11.4～1982.2.5 第3分冊、1982.2.6～1982.3.14 転寮。1983.1.23退校 *藤田未発表原稿「誰が悪いのでもない」では平井幸策という仮名で記述される。	
90	1981.8.28	1982.3.15	3冊 第1分冊、1981.4.28～1981.8.23 第2分冊、1981.8.24～1981.12.21 第3分冊、1981.12.22～1982.3.15 転寮。1983.1.23退校	
91	1981.9.21	1982.3.31	2冊 第1冊、1981.9.21～1982.1.17 第2冊、1982.1.18～1982.3.31	
92	1982.2.26	1984.3.25	2冊 第1分冊、1982.2.26～1982.5.3 第2分冊、1984.1.17～1984.3.25卒業	

93	1982.3.29	1984.4.3	2冊 第1分冊、1982.3.29～1982.5.3 第2分冊、1984.1.17～1984.4.3卒業 *「卒業を前にして」B4×5枚	
94	1982.4.30	1984.4.4	2冊 第1分冊、1982.4.30～1982.5.2 第2分冊、1984.1.17～1984.4.4卒業	
95	1982.6.25	1983.9.1	4冊 第1分冊、1982.6.25～1982.10.12 第2分冊、1982.10.13～1983.2.18 第3分冊、1983.2.19～1983.7.3 第4分冊、1983.7.4～1983.9.1	
96	1982.7.30	1985.3.20	7冊 第1分冊、1982.7.30～1982.10.19 第2分冊、1982.10.20～1983.3.2 第3分冊、1983.3.3～1983.7.18 第4分冊、1983.7.19～1984.9.1 第5分冊、1984.1.17～1984.6.13 第6分冊、1984.6.14～1985.3.14 第7分冊、1985.3.13～1985.3.20卒業	
97	1982.9.30	1985.3.20		日誌は、家庭学校で保管。
98	1982.10.1	1984.3.26	4冊 第1分冊、1982.10.1～1983.1.20 第2分冊、1983.1.21～1983.5.19 第3分冊、1983.5.19～1983.9.1 第4分冊、1984.1.17～1984.3.26卒業	掬泉寮より転入。
99	1982.10.29	1984.3.26	4冊 第1分冊、1982.10.29～1983.3.4 第2分冊、1983.3.25～1983.7.18 第3分冊、1983.7.19～1983.9.1 第4分冊、1984.1.17～1984.3.26 *「自分の今の気持ち 家庭学校の事 五十九年三月二十五日」原稿用紙(400)3枚	中学1年に復学。
100	1983.2.1	1983.4.8	1冊 1983.2.1～1983.4.8	掬泉寮より一時緊急分散で来る。
101	1983.2.1	1983.7.27	2冊 第1分冊、1983.2.1～1983.5.11 第2分冊、1983.5.12～1983.7.27卒業 家業(運送業)に従事。	掬泉寮緊急分散で来る。
102	1983.3.10	18985.3.23	5冊 第1分冊、1983.3.10～1983.7.6 第2分冊、1983.7.7～1983.9.1 第3分冊、1984.1.17～1984.7.1 第4分冊、1984.7.2～1985.3.13 第5分冊、1985.3.14～1985.3.23卒業	

103	1983.4.25	1984.6.8	3冊 第1分冊、1983.4.25～1983.8.24 第2分冊、1983.8.25～1983.9.1 第3分冊、1984.1.17～1984.6.8卒業（就職）	
104	1983.6.13	1984.7.21	3冊 第1分冊、1983.6.13～1983.9.1 *「日記」（12.27～1.89）を含む保存袋。 第2分冊、1984.1.17～1984.6.8 第3分冊、1984.6.9～1984.7.21	
105	1983.7.12	1984.7.21	3冊 第1分冊、1983.7.12～1983.9.1 第2分冊、1984.1.17～1984.6.14 第3分冊、1984.6.15～1984.7.21（9月卒業） *1983.12.27正月帰省。 「1984.1.9の帰省予定日に全校で唯一人**（105）だけ帰校せず」	
106	1983.9.19	1985.3.30	4冊 第1分冊、1983.9.19～1983.10.2 第2分冊、1984.1.17～1984.7.19 第3分冊、1984.7.20～1985.3.16 第4分冊、1985.3.17～1985.3.30卒業	
107	1983.10.26	1985.4.11	4冊 第1分冊、1983.10.26～1983.10.27 第2分冊、1984.1.17～1984.5.27 第3分冊、1984.5.28～1985.1.26 第4分冊、1985.1.27～1985.4.11卒業	
108	1984.3.28	1987.4.6	7冊 第1分冊、1984.3.28～1985.2.11 第2分冊、1985.2.12～1985.7.11 第3分冊、1985.7.12～1985.10.18 第4分冊、1985.10.19～1986.4.10 第5分冊、1986.4.11～1986.9.6 第6分冊、1986.9.7～1987.2.8 第7分冊、1987.2.10～1987.4.6卒業	中学1年に復学。
109	1984.5.1	1986.3.21	4冊 第1分冊、1984.5.1～1985.1.10 第2分冊、1985.1.11～1985.6.1 第3分冊、1985.6.2～1985.10.18 第4分冊、1985.10.19～1986.3.21卒業	
110	1984.7.3	1988.3.21	10冊 第1分冊、1984.5.30～1985.3.2 第2分冊、1985.3.3～1985.7.31 第3分冊、1985.8.1～1985.10.18 *「石上館煙草事件についての報告」藤田俊二、昭和60年10月15日、原稿用紙3枚 第4分冊、1985.10.19～1986.4.17 第5分冊、1986.4.18～1986.9.12 第6分冊、1986.9.13～1987.3.4 第7分冊、1987.3.5～1987.7.10 第8分冊、1987.7.11～1987.11.15 第9分冊、1987.11.16～1988.3.11	

			第10分冊、1988.3.12～1988.3.21卒業 日誌末尾に「再非行など100%なし 1988.3.21（大安）藤田記（55才）」と記載。	
111	1984.7.3	1985.8.12	3冊 第1分冊、1984.7.3～1985.2.21 *「平和寮から緊急転寮」 第2分冊、1985.2.22～1985.6.18 第3分冊、1985.6.19～1985.8.12卒業	
112	1984.9.5	1985.12.17	5冊 第1分冊、1984.9.5～1985.2.23 第2分冊、1985.2.24～1985.5.29 第3分冊、1985.5.30～1985.8.6 第4分冊、1985.8.7～1985.10.18 第5分冊、1985.10.19～1985.12.17卒業	
113	1984.10.5	1989.4.11	11冊 第1分冊、1984.10.24～1985.3.29 第2分冊、1985.3.30～1985.8.5 第3分冊、1985.8.6～1985.10.18 第4分冊、1985.10.19～1986.4.3 第5分冊、1986.4.4～1986.8.21 第6分冊、1986.8.22～1987.1.29 第7分冊、1987.1.30～1987.3.21 （養護施設）「美深育成園へ措置変更」 再入校 第8分冊、1988.8.18～1988.10.9 第9分冊、1988.10.10～1988.12.18 第10分冊、1988.12.19～1989.4.6 第11分冊、1989.4.7～1989.4.11 「無外したまま退校」。 以後、6月8日まで記述（36頁）。 「…小学校5年生で入校して4年、僕はほんやりとお前の様々な時の顔を思い出している。お前は可哀想な身の上だ。しかし、それだからこそきちんと生きなければならないのだよ！結局は僕はお前になんの役にも立たなかった！申し訳ない。1989.6.8藤田」。 **（113）の姓は母方の実家の姓。	1989.4.11 無外（無断外出）のまま退校、6.5 北海少年院へ。
114	1984.11.27	1985.5.19	3冊 第1分冊、1984.11.27～1985.2.17 第2分冊、1985.2.18～1985.5.9 第3分冊、1985.5.10～1985.5.19中途卒業	
115	1985.3.19	1987.4.8	6冊 第1分冊、1985.3.19～1985.7.19 第2分冊、1985.7.20～1985.10.18 第3分冊、1985.10.19～1986.4.12 第4分冊、1986.4.13～1986.8.28 第5分冊、1986.8.29～1986.12.14 第6分冊、1986.12.15～1987.4.8卒業 日誌末尾に以下の記載。「…真面目に頑張っていれば、世の中段々いいことがふえて来るからな！頑張れよ！**（115）62.4.9藤田」。	

116	1985.6.4	1988.3.21	9冊 第1分冊、1985.6.4～1985.8.22 第2分冊、1985.8.23～1985.10.18 第3分冊、1985.10.19～1986.4.13 第4分冊、1986.4.14～1986.8.28 第5分冊、1986.8.29～1987.2.3 第6分冊、1987.2.4～1987.6.24 第7分冊、1987.6.25～1987.10.28 第8分冊、1987.10.29～1988.2.29 第9分冊、1988.3.1～1988.3.21	
117	1985.7.15	1987.2.2	4冊 第1分冊、1985.7.15～1985.10.18 第2分冊、1985.10.19～1986.4.9 第3分冊、1986.4.10～1986.9.3 第4分冊、1986.9.4～1987.2.2 * 卒業する** (117) の思い出作文「**さんの思い出」B4×12人	
118	1985.9.2	1987.5.23	5冊 第1分冊、1985.9.2～1985.10.18 第2分冊、1985.10.19～1986.4.24 第3分冊、1986.4.25～1986.9.22 第4分冊、1986.9.23～1987.3.5 第5分冊、1987.3.6～1987.5.23卒業 「卒業を前にしての作文」B4×9枚。	
119	1985.11.7	1987.3.17	3冊 第1分冊、1985.11.7～1986.4.29 第2分冊、1986.4.30～1986.9.21 第3分冊、1986.9.22～1987.3.17卒業	
120	1985.12.20	1987.9.15	5冊 第1分冊、1985.12.10～1986.5.14 第2分冊、1986.5.15～1986.10.6 第3分冊、1986.10.7～1987.3.18 第4分冊、1987.3.19～1987.7.30 第5分冊、1987.7.31～1987.9.15卒業	
121	1986.4.22	1986.8.21	1冊 第1冊、1986.4.22～1986.8.21	「強制引き取りで退校」札幌市内の中学校に復学。
122	1986.9.12	1987.3.17	2冊 第1分冊、1986.9.12～1987.1.20 第2分冊、1987.1.21～1987.3.17卒業	楽山寮より転入。
123	1986.7.25	1988.5.5	5冊 第1分冊、1986.7.25～1986.12.25 第2分冊、1986.12.26～1987.5.26 第3分冊、1987.5.27～1987.9.7 第4分冊、1987.9.8～1988.1.14 第5分冊、1988.1.15～1988.5.5卒業	
124	1986.8.25	1988.5.5	6冊 第1分冊、1986.8.25～1987.1.25	

			<p>第2分冊、1987.1.26～1987.6.1 第3分冊、1987.6.2～1987.9.30 第4分冊、1987.10.1～1988.1.6 第5分冊、1988.1.7～1988.4.19 第6冊、1988.4.20～1988.5.5卒業 校長は評価するが、セツ子婦人の評価がよくない。 ** (118) によっていびられ、「小さく暗くいじけ っている」「もっと強くないか！」と記述される。 1987年5月で17才。</p>	
125	1986.10.24	1990.3.13	<p>1冊 第1冊、1990.2.2～1990.3.13</p>	
126	1986.12.5	1988.4.2	<p>4冊 第1分冊、1986.12.5～1987.5.9 第2分冊、1987.5.10～1987.9.24 第3分冊、1987.9.25～1988.2.10 第4分冊、1988.2.11～1988.4.2卒業 日誌末尾に以下の記載。 「母さん、姉ちゃん（帯広在住）、姉ちゃんの夫（20 才位？）が迎えに来て、にこにこしながら発って行っ た。『お世話になりました』大人びた挨拶に僕は** (128)の成長を感じながら握手！ ** (128)なら100%心配することなし！体を大切 にしてしっかり頑張れよ！健闘を心から祈る！ 1988.4.2 大安 藤田記」。</p>	
127	1987.2.4	1988.5.23	<p>4冊 第1分冊、1987.2.4～1987.6.18 第2分冊、1987.6.19～1987.9.29 第3分冊、1987.9.30～1988.1.15 第4分冊、1988.1.16～1988.5.23</p>	
128	1987.3.12	1989.2.22	<p>7冊 第1分冊、1987.3.12～1987.7.22 第2分冊、1987.7.23～1987.11.21 第3分冊、1987.11.22～1988.3.20 第4分冊、1988.3.21～1988.6.26 第5分冊、1988.6.27～1988.9.22 第6分冊、1988.9.23～1988.11.28 第7分冊、1988.11.29～1989.2.22卒業 「父さんが迎えに来て発って行った。父さんとは初 対面、生徒たちが『あれっやーさんだ～～！』と息を のんだ位にそれは暴力団スタイルだったし、顔も、 優しさを怖さが包んでいる様な或いはその逆の様な 感じで、乗って来た車もやーさんがよく乗っている 外車、運転しているのが又弟分風の若者、その若い 人は『少年院を出ました。』と淡々と明るく語り、僕 はどう対応していいか戸惑いながらもえーっと腹を 決めて四方山話をした後に手を振って送り出したの だった。心配は一杯ある！しかし、根本的には『悪 い事はしない』** (128)の倫理観の確さを高く評 価しているから、心配はしていない。再非行は100% なしとみる。ただな** (128)！人にだけは好かれ る様に努力すれよ！そして頑張れよ！頑張ればなん とかなるのだから～～！。 1989.2.22 藤田俊二」。</p>	

129	1987.7.9	1989.4.12	8冊 第1分冊、1987.7.9～1987.11.2 第2分冊、1987.11.3～1988.2.29 第3分冊、1988.3.1～1988.6.6 第4分冊、1988.6.7～1988.9.13 第5分冊、1988.9.14～1988.11.18 第6分冊、1988.11.18～1989.1.26 第7分冊、1989.1.27～1989.3.27 第8分冊、1989.3.28～1989.4.11	1989.4.11 無外。無外 のまま退 校、5.29東 北少年院 へ。
130	1987.8.20	1990.3.13	11冊 第1分冊、1987.8.20～1987.12.2 第2分冊、1987.12.3～1988.3.23 第3分冊、1988.3.24～1988.6.25 第4分冊、1988.6.26～1988.9.28 第5分冊、1988.9.29～1988.12.15 第6分冊、1988.12.16～1989.4.23 第7分冊、1989.4.14～1989.8.18 第8分冊、1989.8.19～1989.10.19 「10.19 洗濯をやり直せ そんな厚い真冬に着ると つくりセーターを着て作業班に行く奴があるかと 怒鳴りつけたら形相変えてむくれた。単にむくれた というより、反抗的な眼で今にも踊りかからんばかり の形相、眼がすわっての大むくれ 大喝」とノートに 朱筆して大書。 第9分冊、1989.10.20～1989.12.24 第10分冊、1989.12.25～1990.2.28 第11冊、1990.3.1～1990.3.13 「午後の職員会で決定。3月17日で僕の石上館は終 り。3月21日から捧先生の石上館が始まる」。	
131	1987.9.30	1989.11.2	7冊 第1分冊、1987.9.30～1988.2.1 第2分冊、1988.2.2～1988.6.8 第3分冊、1988.6.9～1988.9.15 第4分冊、1988.9.16～1988.12.1 第5分冊、1988.12.2～1989.4.10 第6分冊、1989.4.11～1989.8.18 第7分冊、1989.8.18～1989.11.2卒業 ** (131) が卒業の挨拶をする。「僕は2年1ヶ月 ここで暮らして来ました。辛い事や楽しい事がいっ ぱいあったけれど、頑張ってきた。皆さんも頑 張って下さい。なんとなく** (131) が言うはずっ しりとした重味があって、僕はじっと腕組みして目 をつぶって聞いた。…」	
132	1987.11.13	1989.4.12	6冊 第1分冊、1987.11.13～1988.3.1 第2分冊、1988.3.2～1988.6.26 第3分冊、1988.6.27～1988.9.20 第4分冊、1988.9.21～1988.12.5 第5分冊、1988.12.6～1989.3.30 第6分冊、1989.3.31～1989.4.12	1989.4.1無 外のまま少 年院。
133	1988.4.22	1990.3.13	7冊 第1分冊、1988.4.22～1988.7.29 第2分冊、1988.7.30～1988.11.13	

			第3分冊、1988.11.14～1989.3.23 第4分冊、1989.3.24～1989.6.25 第5分冊、1989.6.26～1989.10.5 第6分冊、1989.10.6～1989.12.17 第7分冊、1990.3.9～1990.3.13 「3月17日で僕の石上館は終り。3月21日から棒先生の石上館が始まることに決定」。	
134	1988.5.3	1988.10.13	2冊 第1分冊、1988.5.3～1988.7.3 第2分冊、1988.7.4～1988.10.13 卒業の10月13日「考える所有り。送別会も挨拶廻りもなし」。日誌(128)	1986.11.28 入校。楽山寮から転入。
135	1988.6.29	1990.3.13	7冊 第1分冊、1988.6.29～1988.9.27 第2分冊、1988.9.28～1988.12.16 第3分冊、1988.12.17～1989.4.5 第4分冊、1989.4.6～1989.8.18 第5分冊、1989.8.19～1989.11.19 第6分冊、1989.11.20～1990.2.10 第7分冊、1990.2.11～1990.3.13 日誌末尾に以下の記載。「3月17日で僕の石上館は終わり。3月21日から棒先生の石上館が始まる。3月24日付けで石橋の退所申請書を発送」。	
136	1988.10.24	1987.8.17	3冊 第1分冊、1988.10.24～1988.10.24 第2分冊、1988.12.25～1989.4.12 第3分冊、1989.4.13～1989.8.17	1989.4.12 無外。6.1札幌少年鑑別所へ。 6.22家裁審判で復学に決定。
137	1988.12.3	1990.3.13	7冊 第1分冊、1988.12.3～1989.2.25 第2分冊、1989.2.26～1989.5.16 第3分冊、1989.5.17～1989.8.24 第4分冊、1989.8.25～1989.11.4 第5分冊、1989.11.5～1989.12.17 第6分冊、1989.12.18～1990.2.16 第7分冊、1990.2.17～1990.3.13 「午後の職員会で決定。3月17日で僕の石上館は終り。3月21日から棒先生の石上館が始まる」。	
138	1988.12.5	1989.2.6	1冊 第1冊、1988.12.5～1989.2.6(卒業) 「全校1.2の大物」ボス(日誌:131)、卒業。	1986.11.21 入校。桂林寮から転入。
139	1988.12.26	1989.9.6	4冊 第1分冊、1988.12.26～1989.4.12 第2分冊、1989.4.13～1989.6.11 第3分冊、1989.6.12～1989.8.20 第4分冊、1989.8.21～1989.9.6緊急退校 *暴力行為の状況について赤のボールペンで大書して記述する頁が続く。12頁。9月25日まで。	1989.9.7北見児童相談所へ送致、一時保護。

			<p>9.8「本当は淋しい孤独な少年だった** (139)。しかし、僕はどうしても切らざるを得なかった。今にして辛さがつのるが切らざるを得なかった」。</p> <p>身長は186cm。「なんとも辛い成績査定会議だった。更に辛いのは大物** (139) を御せないでいる自らの非力!」。日誌(131)、8.23</p> <p>「** (139) が持って来た缶コーラ10ヶ、「投げて下さい」と** (137) が言いに来たので捨てる。惨。淋しい」。日誌(139)、1989.9.5</p> <p>「** (139) が居なくなった途端に寮の雰囲気が一変してしまった。** (130) が笑い、** (140) がふざけ、…。本当は淋しい孤独な少年だった** (139)。しかし、僕はどうしても切らざるを得なかった」。日誌(139)、1989.9.8</p> <p>北見児相家村先生来校「** (139) 君は結局2泊だけの一時保護で家に帰りました。指導限界児であることを切実に痛感しました」日誌(140)、1989.9.13</p>	
140	1989.5.1	1990.3.13	<p>4冊</p> <p>第1分冊、1989.5.1~1989.8.18</p> <p>第2分冊、1989.8.18~1989.11.20</p> <p>第3分冊、1989.11.21~1990.2.20</p> <p>第4分冊、1990.2.21~1990.3.13</p> <p>「午後の職員会で決定。3月17日で僕の石上館は終り。3月21日から捧先生の石上館が始まる」。</p>	
141	1989.6.19	1990.3.13	<p>4冊</p> <p>第1分冊、1989、6、19~1989.10、4</p> <p>第2分冊、1989、10、5~1989.12、17</p> <p>第3分冊、1989、12、18~1990、3、6</p> <p>第4分冊、1990、3、7~1990.3、13</p> <p>「3月17日で僕の石上館は終り、3月21日から捧先生の石上館が始まる」。</p>	
142	1989.9.21	1990.3.13	<p>3冊</p> <p>第1分冊、1989.9.21~1989.12.6</p> <p>第2分冊、1989.12.7~1990.2.12</p> <p>第3分冊、1990.2.13~1990.3.13</p> <p>「3月17日で僕の石上館は終り。3月21日で捧先生の石上館が始まる」。</p>	
143	1989.11.1		<p>教務部長兼楽山寮長の立場であったため、日誌には記さず。</p>	
144	1989.11.15	1990.3.13	<p>2冊</p> <p>第1冊、1989.11.15~1989.2.11</p> <p>第2冊、1990.2.12~1990.3.13</p> <p>「午後の職員会で決定。3月17日で僕の石上館は終り。捧先生の石上館が3月21日から始まる」。</p>	
145	1989.12.6	1990.3.13	<p>2冊</p> <p>第1冊、1989.12.6~1990.2.18</p> <p>第2冊、1990.2.19~1990.3.13</p> <p>「午後の職員会で決定。3月17日で僕の石上館は終り。3月21日から捧先生の石上館が始まる」。</p>	
146	1990.1.9	1990.2.18	<p>1冊</p> <p>第1冊、1990.1.9~1990.2.18卒業</p>	<p>楽山寮の閉鎖により転入。</p>

147	1990.1.9	1990.3.13	1冊 第1冊、1990.1.9～1990.3.13 「3月17日で僕の石上館は終り、3月21日から棒先生 の石上館が始まる」。	楽山寮の閉鎖により転入。
-----	----------	-----------	--	--------------